平成30周年度おきぎんふるさと振興基金事業報告書

琉球三線楽器保存・育成会創立30周年
記念事業実行委員会
会　長　　宜保榮治郎

1、「沖縄が誇る家宝の三線展」を、2019年2月5日から3月10日まで沖縄県立博物館・美術館企画展示室にて開催いたしました。

2、琉球三線楽器保存・育成会は、1986年に誕生し、このたび30周記念事業として開催するものです。沖縄の三線文化は、三線を単なる楽器として演奏するだけでもなく、三線の棹に、美しさや価値を見出しつつ、各家々の家宝として大切に受け継がれてきたという歴史があります。

個人が所有されている琉球三線の中には、琉球王朝時代に製作されたものもあれば，明治、大正、昭和初期にかけて製作され、先の沖縄戦を潜り抜けて残されたものもあります。

そうした琉球三線について先祖何代も前から受け継いでこられた県民の皆さんに、毎月一回琉球三線調査会に会場である博物館にもってきていただき、琉球三線楽器保存・育成会の方々が、琉球三線の棹の型、材質、あるいは、製作の時代等について記録を取ってきました。

3、琉球三線楽器保存・育成会の活動は、沖縄の三線文化を守る役割、琉球三線楽器を守り伝える活動をしています。今回の展示会は、琉球三線楽器保存・育成会の30年間にわたる活動で、三線調査会で見出された琉球三線について、所有者の方々のご理解とご協力を得て展示させていただくものです。1986年から2018年までの調査した1.、000挺以上の琉球三線のリストの中から60挺をお借りして、展示する運びになりました。お借りする段階になって、所有者の皆さんから琉球三線に対する思いを伺い、琉球三線が、各家々の家宝として大切にされてきたことを感じました。

4、今回の記念事業「沖縄の誇る家宝の三線展」の来場者は、沖縄県内外から 5,000 人以上の方々がおこしいただきました。

5、おきぎんふるさと振興基金を活用して、琉球三線楽器保存・育成会創立30周年記念「沖縄が誇る家宝の三線展」記念図録誌を作ることができました。記念図録誌は、これから琉球文化、琉球三線を幅広い方々に伝わるように沖縄県内小・中・高校・公立図書館をはじめ公共機関に配布させていただ来ました。

令和元年６月吉日

「沖縄が誇る家宝の三線展」協賛者
各　位

琉球三線楽器保存・育成会
創立30周年記念事業実行委員会
会　長　　宜　保　榮治郎

御　礼

謹啓、時下ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

平素より、琉球三線楽器保存・育成会の事業にご理解たまわり、ご支援いただき、誠にありがとうございます。また、この度は、平成30年度博物館企画展・琉球三線楽器保存・育成会創立30周年記念「沖縄が誇る家宝の三線展」の開催におきまして、多大なるご協力を賜り、心より御礼申し上げます。おかげさまにて、同展覧会も多くの来場者を得て、去った3月10日に無事閉幕いたしました。会期中には、展示された三線とそれぞれにまつわる歴史等をご観覧になられた方々から、ウチナーンチュが大切に守り伝えてきた三線への思いを賞賛する声がたくさん寄せられました。これもひとえに、皆様方のご理解とご協力の賜物と感謝しております。

さて、琉球三線楽器保存・育成会では、30周年の実績をふまえ、ますます多くの三線名器を発見するため、精力的に三線鑑定会を行っていく所存です。今後とも、沖縄の貴重な文化遺産である三線の保存・育成に力を注ぎ、三線文化の継承のために尽力してまいります。

今後とも、琉球三線楽器保存・育成会及び沖縄県立博物館・美術館へご支援ご協力くださいますよう、心よりお願い申し上げます。

敬具

琉球三線楽器保存・育成会
創立三十周年記念

沖縄が誇る
家宝の三線展

The Sanshin : The Pride of Okinawa

沖縄県立博物館・美術館
琉球三線楽器保存・育成会

琉球三線楽器保存・育成会
創立三十周年記念

沖縄が誇る
三線の家宝展

The Sanshin : The Pride of Okinawa

ごあいさつ

平成30年度企画展「沖縄が誇る家宝の三線展」の開催にあたり、ごあいさつ申し上げます。当館の前身である沖縄県立博物館において、昭和61年（1986年）に誕生した「琉球三線楽器保存・育成会」が、一昨年をもちまして創立30周年を迎えました。このたびの展覧会は、同会の30周年を記念して、当館との共催で開催するものです。

さて、沖縄の三線文化は、三線を単なる楽器として演奏するだけではなく、棹に美しさや価値を見い出しつつ、各家々の家宝として大切に受け継がれてきたという歴史があります。個人が所有されている三線のなかには、琉球王国時代に製作されたものもあれば、明治・大正・昭和初期にかけて製作され、先の沖縄戦をくぐり抜けて残されてきたものもあります。そうした三線について、何代も前から受け継いで来られた県民の皆様に、鑑定ということで博物館に持ってきていただき、育成会の先生方の目を通して型や材質、あるいは製作された時代についての記録が取られました。育成会の活動というものは、沖縄の文化財を守る博物館の役割ともあいまって、三線楽器を守り伝える活動にも寄与しており、博物館としても全面的に協力してきた次第です。

今回の展覧会は、そのような琉球三線楽器保存・育成会の30年間にわたる活動に敬意を表し、育成会との共催で、鑑定会で見い出されてきた三線について、所蔵者のご理解とご協力を得て、展示させていただくものです。育成会の先生方が、主に1995年以降に調査した600挺の三線のリストのなかから厳選した60挺をお借りして、展示する運びになりました。お借りする段になって、所蔵者の皆様からそれぞれの三線に対する思いを伺い、三線が各々の家の家宝として大切にされてきたことを改めて感じました。本展覧会においては、家宝の三線をできる限り多くの皆様にご覧いただき、沖縄の誇りともいえる三線文化の伝統の継承とますますの発展に繋げてまいりたいと思います。

最後に、本展覧会の開催にあたり、２年前からともに準備に携わってこられました琉球三線楽器保存・育成会に感謝申し上げるとともに、県民の皆様のご支援に深く感謝して、ごあいさつといたします。

平成31年２月５日

沖縄県立博物館・美術館
館　長　　田　名　真　之

ごあいさつ

「沖縄が誇る家宝の三線展」をご覧になられるため、ご来場くださった皆様、また関係者各位に御礼申し上げます。私が博物館副館長時代に三線鑑賞会（のちに「三線鑑定会」に改称）を発足させたのには、次のようなことがありました。

昭和47年の日本復帰を前に文化庁からたびたび沖縄の文化財調査団が来島しました。その最後の調査団の中に山本信吉美術工芸調査官がおられまして、当時指定されていた三線を前に次のようなことを私におっしゃいました。「実は大和には沖縄の三線を研究されている方が全くいないので、この三線が国指定に値するかどうかは判断ができない。それで、三線の指定が『積みのこし』となった。どうか今後沖縄のほうで科学的に研究しておくように。このことは君と私の約束としよう。」、となったのです。

世間では、沖縄が最も大切にしている三線が復帰時に国宝とならなかったことには随分不満の声もありました。そこで私が博物館副館長になった時に、琉球音楽界長老の宮里春行さん、宮城嗣周さん、現役の島袋正雄さん、照喜名朝一さん、新垣萬善さん等に呼びかけて「三線鑑賞会」を結成しました。そのことはこれまでまちまちであった「三線の型」を統一することと、名器とされる三線が戦後どれだけ残っているかを確認することにありました。

その会が結成されて数年後には、各先生方の意見や方法がほぼ一致したので「三線名器100挺展」を行いましたところ、連日のように三線愛好者が観覧に訪れ大盛況でした。その開会式の時のあいさつで、宮里春行先生が涙を流しながら「あの鉄の暴風でも沖縄の三線は消せなかったのだ。」との名言を残されました。

その後、先の約束通り文化庁の山本信吉参事は、これまで「三線鑑賞会」が調べた記録発刊に補助をくださいました。以上のことを今回の「家宝の三線展」をご覧になられる方はご理解くださいますようお願いして、ごあいさつといたします。

平成31年２月５日

琉球三線楽器保存・育成会
会　長　　宜　保　榮治郎

【目次】

ごあいさつ/2
第１章　沖縄の宝　三線文化をつくった名器たち/5
第２章　家宝の三線/11
第３章　三線とは/49
「ヤーヌタカラ（家宝）」となった三線/50
三線関連略年表/55
三線 部位の名称・素材・型について/56
育成会会員に聞く！　三線Q&A/58
第４章　琉球三線楽器保存・育成会のあゆみ/59
琉球三線楽器保存・育成会のあゆみ/60
琉球三線楽器保存・育成会の活動の一例/64
育成会会員のコラム/66
琉球三線楽器保存・育成会会則/72
資料編　琉球三線楽器保存・育成会が鑑定した三線一覧/74
展示資料目録/94
関連催事/98
琉球三線楽器保存・育成会創立30周年記念事業実行委員会の備忘録/99
協力者及び協力機関・主要参考文献/102
協賛広告　（公財）おきぎんふるさと振興基金ほか/103

【凡例】

1．本書は2019年２月５日～３月10日まで開催する平成30年度博物館企画展・琉球三線楽器保存・育成会創立30周年記念「沖縄が誇る家宝の三線展」の図録である。
2．本展は、沖縄県立博物館・美術館（以下、「博物館」という。）と琉球三線楽器保存・育成会（以下、「育成会」という。）がともに主催して開催するものである。
3．本展は、博物館の大湾ゆかり（主）、篠原あかね（副）、萩尾俊章（副）が担当し、育成会では「琉球三線楽器保存･育成会創立30周年記念事業実行委員会（以下､「実行委員会」という。)」を設置して、両者で協力して実施した。
4．本展の目的は、育成会が過去に鑑定した三線の中から、家宝三線を選び出して紹介することで、その選定作業や三線の所有者への出展依頼は、実行委員会が担当した。
5．本図録は、（公財）おきぎんふるさと振興基金をはじめとする育成会が募集した協賛団体からの資金提供をもとに刊行した。
6．本図録の第１～３章の執筆は、博物館の萩尾俊章、園原謙、大湾ゆかり、篠原あかねが行い、図版頁の写真撮影は、ケネスクリエイト・オキナワの早瀬竜太が、撮影補助は、育成会の上江洲義昭、岸本尚登が担当した。ただし、７頁と14頁の三線は、大湾が撮影した。家宝の三線の各解説は、所有者から聞き取りをしたお話をもとに、萩尾、大湾、篠原が要約したものである。
7．本図録第４章は、育成会会員が執筆したコラムと育成会提供の資料をもとに、大湾と篠原が編集し、掲載した。
8．育成会の三線鑑定一覧は、育成会が保管していた資料をもとに、沖縄県三線製作事業協同組合の新垣恵がリストを作成し、博物館の大湾と大底ひろみが編集した。なお、鑑定一覧には、個人情報にあたる所有者の住所氏名は省いた。
9．展示資料目録は、本図録の章立てにあわせて掲載したが、実際の展示順序とは必ずしも一致しない。また図録の掲載資料が展示資料のすべてではない。
10．本図録第２章における資料の掲載順序は、時代（王府・明治・大正・昭和初期・昭和中後期）、型（南風原・知念大工・久場春殿・久葉の骨・真壁・与那城）、資料名称の五十音順に並びかえた。また同章の最後に戦後復興の中で製作された珍しい三線を掲載した。
11．三線の名称は、所有者の了解のもと「所有者の名字または屋号＋三線の型」を基本とし、特別な謂われのある三線については、それぞれの銘書きを載せた。
12．三線の法量は、全長をcmで、重量をgで表した。なお、三線鑑定一覧は、鑑定書にある通りに掲載した。
13．本図録の監修は、博物館館長の田名真之と博物館班長の園原謙、及び実行委員会事務局長の前原信喜が担当した。
14．本図録掲載写真の無断使用は、これを禁ずる。

第１章

沖縄の宝
三線文化をつくった名器たち

沖縄の三線は、伝統音楽を奏でる楽器としてだけでなく、ウチナーンチュの心の拠り所として大切にされてきました。本章では、そうした文化を築いた三線の中から「開鐘（けーじょー）」と呼ばれる三線をはじめ、沖縄県の文化財に指定されるなどした名器三線を紹介します。

「琉球人舞楽之図」絹本着色　19世紀　沖縄県立博物館・美術館蔵

江戸立した琉球使節団の楽師や楽童子らを描いた図。楽童子が奏でる楽器は、今日「琉球楽器」と呼ばれるものである。右から３人目の楽童子は三線を弾いている。本紙左上に「藤原」の印が捺され、左下の袋の上には「□信筆」と作者の名前が記されている。

三線　久場春殿型　県指定有形文化財（1958年指定）　個人蔵

糸満の豪農が中城御殿から譲り受けて所有していたとの話が伝わる三線。

代々演奏家に受け継がれている。久場春殿は棹がもっとも太く直線的な姿で、天の曲がりが少なく扁平な形に特徴がある。芯の付け根に段があり、正面に△の穴が開けられている。爪裏は角ノミで総取りに仕上げられている。

三線　真壁型　一名「御茶屋御物」　川田力也 蔵

戦前の琉球民謡の第一人者であった川田松夫氏（旧姓嘉数松雄）が所蔵していた三線。

芯正面に「乾隆二十一年丙子」、左側面に「於崎山之御殿御前二而作」、裏面に「御茶屋御物」、右側面「ヨナ城」の文字が線彫され朱がさされている。この三線は昭和14年（1939）に首里城南殿で行われた江戸与那の供養祭に出陳された24挺の三線のうちのひとつの「御茶屋御物」と一致する可能性がある。

文化財に指定された三線　ー真壁型

志多伯開鐘

真壁型　銘西平

盛嶋開鐘　附胴

真壁型　銘安室

文化財に指定された三線　－久葉の骨型・与那城型

久葉の骨型

江戸与那

与那城型 銘玉城與那

図版解説：

三線　志多伯開鐘　県指定有形文化財（1955年指定）　個人蔵

三線の中で最初に文化財指定された名器である。芯の表に「志多伯開鐘」、裏に「伊江御殿」と朱書きされている。

三線　盛嶋開鐘　附胴　県指定有形文化財（1994年指定）　沖縄県立博物館・美術館蔵

琉球王家が所蔵していた真壁型の三線である。芯正面に朱で「盛嶋開鐘」と記されている。古い胴が現存する貴重な作例で、胴内部が複雑に彫り込まれており、墨書きで「咸豊拾年庚申八月吉日」「渡慶次筑親雲上作」と記されている。

三線　真壁型　銘西平　県指定有形文化財（1994年指定）　個人蔵

五開鐘のひとつで、一名「西平開鐘」と呼ばれている。真壁型の正型で、範のバランスが良く均整のとれた姿をしている。芯の表面に「西平」と彫られている。琉球王府時代に作られた開鐘のうち、戦後の完品は本器のみとも言われるほどの名器である。

三線　真壁型　銘安室　県指定有形文化財（1994年指定）　個人蔵

真壁型の中では大型でしっかりとした作りが魅力の三線。芯の右側に「安室」、左側に「譲子孫」と彫りに朱書きされ、代々子孫に伝えることが刻まれている。終戦直後に首里の避難民から現所有者が譲り受けたという。

三線　久葉の骨型　県指定有形文化財（1958年指定）　個人蔵

久葉の骨型は７つの型のひとつで、久場春殿が作ったと伝えられている。細い棹とゆるやかな天の曲がりをクバ（ビロウ）の葉柄に見立てたことからこの名前がついた。

三線　江戸与那　県指定有形文化財（1956年指定）　沖縄県立博物館・美術館蔵

1855年に江戸から琉球への道中に浦崎親方が島津家に献上したと伝えられている。与那城型の中でも糸蔵が１㎝程度長い特徴を持つ。芯には３つの丸い穴があけられている。戦後行方不明になり、一時ハワイに渡ったが、沖縄へ返還された。

三線　与那城型　銘玉城與那　県指定有形文化財（1994年指定）　沖縄県立博物館・美術館蔵

芯の右側に「玉城」、左に「與那」と金字で書かれている。この三線は、琉球古典音楽の人間国宝である島袋正雄氏が旧蔵していたが、同氏のガジマヤーの祝いの記念で2017年博物館に寄贈された。

文化財に指定された三線
－南風原型

拝領 南風原型

南風原型

三線を弾く琉球美人

図版解説：

三線　南風原型　県指定有形文化財（1958年指定）　個人蔵

芯の表に「拝領南風原」とあることから、一名「拝領南風原型」と呼ばれる三線。芯の裏には「伊江御殿」と朱書きされている。尚家の分家である伊江御殿に伝来するとされる由緒ある三線である。

三線　南風原型　県指定有形文化財（1958年指定）　個人蔵

琉球王府時代の名工の名前から「南風原型」と呼ばれている三線である。「南風原型」は７つの型の中で最も古いとされている。細身の棹と大きく曲がった野坂が特徴。芯の正面には３つの穴が開けられている。

「三線を弾く琉球美人」紙本着色　　伊禮吉信 蔵

物憂げな表情を浮かべて三線をつま弾く女性が描かれている。風に揺れる風鈴と足下でまどろむ猫が穏やかな雰囲気をかもし出している。作者は19世紀末の絵師、友寄喜恒と考えられている。

第2章

家宝の三線

琉球三線楽器保存・育成会は県内外の様々な三線を鑑定してきました。30年の歴史の中で鑑定した数は1,000挺を超えています。それらは全て個人が所蔵しており、各家々で大切にされているものです。本章ではウチナーンチュが大切にしてきた「家宝三線」を、所蔵者のエピソードとともに紹介します。

床の間を飾る家宝三線

沖縄では、その家に代々受け継がれてきたご自慢の三線を、家宝として床の間の特等席に飾る習慣がある。各家庭で大切に保管されている三線を、今回は特別にお借りして展示する。一堂に会した家宝三線をぜひご覧ください。

琉球王府時代

牛安冨祖（うさーわし）の古南風原

登録番号17008　南風原型　具志勝枝 蔵

祖父、大城三八（さんぺい）がブラジルに移民した時に、一緒に行った弟に譲った三線。その後、ハワイ、ペルー、再びハワイへと渡り、ハワイで読谷村喜名の三線の先生が発見して沖縄に持ち帰り、三八の長男である父へ返した。この三線は門外不出の家宝三線となり、その後は長男が受け継いだが、兄弟がみな亡くなったので、平成20年から自分の所に来ている。芯の右側面に「玉」と刻まれ、棹の野（トゥーイ）を治すため削られた痕が残っている。棹の長さは81cm と長く、爪裏はやや三角に近い。

新垣の真壁

登録番号30036　真壁型　新垣清仁 蔵

この三線を所有して自分は５代目になる。３代目の祖父は、戦争中、この三線を背中におぶって逃げ、守り通した。祖父は古典の演奏家で、この三線をずっと愛用していた。芯の右側面に「王」という文字や朱書きの丸い文様がみられ、左側面には朱で「覇□□□」という文字がわずかに残っている。

直富主の真壁 附胴 胴銘「道乙酉 渡慶次作」

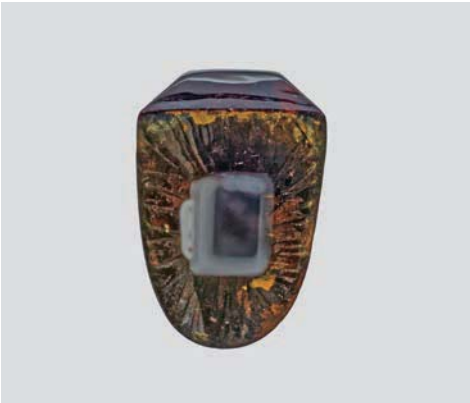
登録番号30061　真壁型　島岡稔 蔵

胴内に「道乙酉　渡慶次作」と墨書される。「道乙酉」とは道光５年、1825年のことで、現存する胴の銘書きでは最古である。胴内部の細工は丸のみで上下に彫った造りである。この三線は、徳之島伊仙阿権湾の有力者であった尚（たかし）家（後に木戸家に改姓）の二代目直富が首里において籾30俵で求めたとされる。盛嶋開鐘の胴書きの「咸豊拾年（1860)」と併記される「渡慶次筑親雲上」との関連性がある可能性がある。

志堅原比屋

参考資料　真壁型　翁長良明 蔵

棹の芯正面に「康熙廿八己巳真壁里之子ウチ」と彫り、朱がさされている。康熙廿八年は1689年で、文字通りに読めば、現存する最古の三線といえる。左側面には「志堅原比屋求之」と彫り朱書きされ、志堅原比屋がこの三線を求めたことも銘記されている。王府の歴史書『球陽』には「志堅原比屋、死後三弦を看るを求む」との見出しで、本三線にまつわる逸話が記されており、様々な観点から注目される三線である。



チンガー謝花ウフヤーの与那

登録番号14013　与那城型　謝花喜哲 蔵

戦前から代々家に伝わる三線で、父が大切に弾いていた。父は私が４歳の頃に亡くなったが、三線を引き継いだ。三線店へ修理に出した際に売却を求められたこともあるが、売らずに大切にしている。名称の「チンガー」は沖縄市池原にある井戸の名前である。棹は全体に赤みがかっており、天に現れたクルチ（黒檀）の木目が見所になっている。

メイチョウターの与那

登録番号23012　与那城型　照喜名朝定 蔵

戦時中はおじが所有していたが、戦後しばらくの間は行方不明になっていた。その後どこからか発見されたようで、同じ門中の三線店から「あなたになら渡す」と託されて、平成20年頃に自分のものとなった。

吉田の与那

登録番号25001　与那城型　吉田光智 蔵

1985年（昭和60）に父が購入した三線。父は島袋正雄先生の直弟子で、この三線は師匠のお墨付きのものである。1958年８月15日付け沖縄県指定文化財三線与那型に指定された「向衡榮」に形状・寸法が酷似しているので、同時代に製作されたと思われる。

マチュー与那

登録番号27031　与那城型　山城興松 蔵

元々弟が所有していたもので、定年後に弟の鉄工所を手伝いに行ったとき、そこにあったこの三線を弾き始めた。練習する姿をみた弟が、20年前に譲ってくれた。以来、最近まで弾いていた。絃を押さえるつぼ（ウスイミー）の剥がれ具合は、よく弾いた痕である。形状は古い与那城型を呈しており、芯の部分は複雑に接がれ、３本の木ピンが入っている。

神谷の小与那

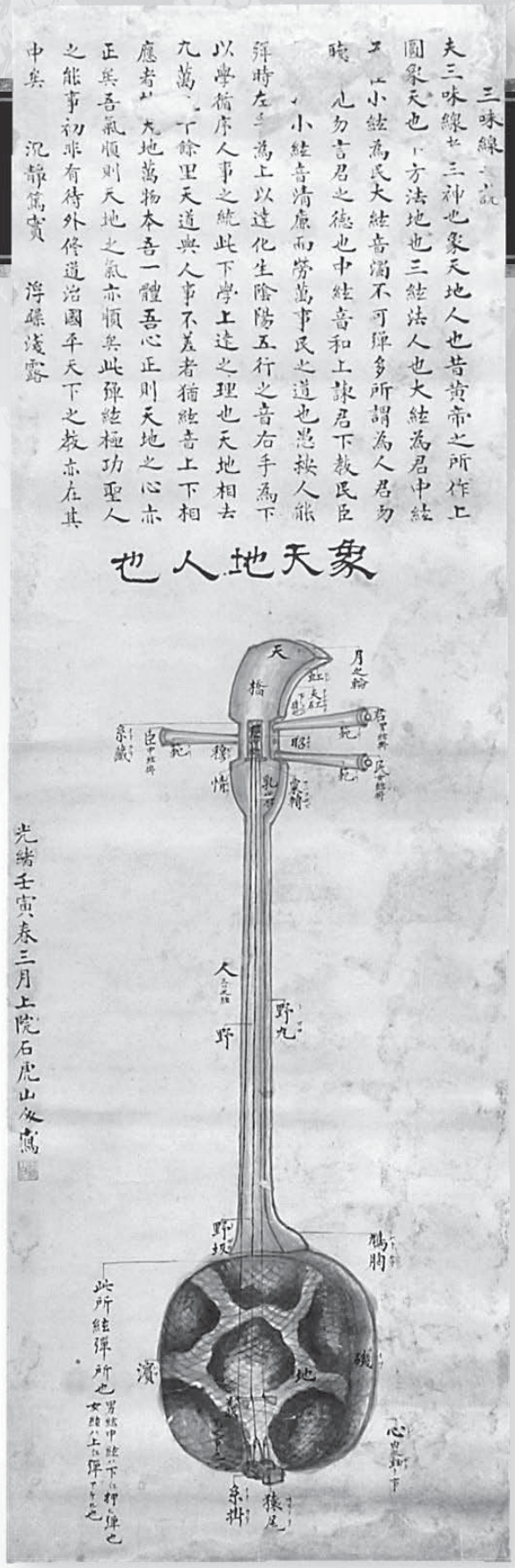
登録番号28032　与那城型　神谷清吉 蔵

大正11年生まれの父が戦後、糸満で買い求めたという話を聞いたことがある。父は糸満の豊年祭で地方（ぢかた）としてこの三線を弾いたこともあったようだ。自分は高校生くらいの頃から持ち出して弾いていた。

第3章

三線とは

本章では、三線とはどのような楽器なのか、その歴史や型などを紹介します。そして、楽器である三線が沖縄で「家宝」として尊ばれるのはなぜなのか、また三線が琉球の歴史の中でどのように扱われているのかなど、論説や年表で解説します。



「三味線之説」（三線の図） 1902年 石虎山人写
沖縄県立博物館・美術館 蔵

三線の部位ごとの名称を図説し、上部には「三味線之説」を記している。「夫れ三味線は三神なり」から始まり、三線は天・地・人を象ると説いている。

「ヤーヌタカラ（家宝）」となった三線

外来文化から在来化した三線

三線がいつから王国の楽として位置づけられたかは不明であるが、その起因は、中国との朝貢関係を通して明清楽が伝播し、琉球風に変容していったと考えられる。中国では古代から礼楽思想があり、儒教の根本的規範となったのが礼と楽とされる。礼とは、日常生活から公式儀典まで、正しい心の外への表現を規定する。また楽とは、音をもって節度のある心を表わすものとされる。知識人の教養は六芸（礼、楽、射、御、書、数）が数えられ、礼と楽はその初めに位置づけられる。とりわけ、中国では当時の楽の中心が、琴であったとされるが、琉球では中国三絃から棹が１尺ほど短くなり、胴もひとまわり大きく変容した三線が主要楽器として位置づけられる。徳川美術館が所蔵する「琉球楽器」は21点の明楽用の楽器で構成される。その中には、三線が二種あり、ひとつは棹が長い三絃で、もうひとつが棹の短い、私たちの見慣れた三線である。棹が長いモノは低い音を発音するが、棹が短くなると高い音を発することができる。合わせて胴が大きくなると、音量の大きさと含みや余韻の広がりを示す。

薩摩進攻後の1612年に王府貝摺奉行所が設置され、そこでの職名のひとつに「三線打」が文献上で確認できる。現代の三線職人につながりを求めることができる。王国の正史として1745年に編纂された『球陽』には、芸妓の志堅原比屋が愛用した三線を死後も求めたという説話が記される。康熙年間の話として紹介されているので、17世紀後半頃にすでに、三線を愛蔵する考え方が存在していたことを垣間見ることができる。1719年には歓待芸能としての「組踊」が首里城北殿前に特設会場が設けられ玉城朝薫によって初演され、ウトゥイムチ（おもてなし）の宮廷芸能の礎をつくる。2000年に世界無形文化遺産に登録された組踊を筆頭に、戦後、国指定重要無形文化財や県指定無形文化財としての琉球古典音楽はその存在感を発揮した。王国時代、三線楽は基本的には、口伝による楽曲の伝授法があったが、屋嘉比朝寄（1716-1775）によって中国の記譜法を参考に、独自の三線音楽記譜法が作られた。それが三線音楽の正しい継承と発展の契機に役立ったとされる。県指定文化財の屋嘉比作工工四には117曲の王国時代の古典音楽が収録される。三線楽は、王国時代、士族の学芸として発達し、楽曲を奏でる主要楽器の三線は、御殿・殿内の門外不出の家宝となっていった。王国解体後の近代には、広く庶民の楽器として受容され、沖縄からの海外への移動した人々（移民）にとっても異国の地で沖縄ゆかりの器物として身近な存在となった。戦後は県内新聞社主催の事業として三線楽をはじめとする芸能コンテストの隆盛により、より一層活性化した。県内には三線職人による戦後製作の三線や県外（国外）産の三線を含め、80万挺を超える三線が存在するという統計学的な数値があり、今日三線はワールドワイドの楽器に成長しつつある。

沖縄におけるヤーヌタカラ（家宝）の定義

全国的に県民所得が低い沖縄に、そもそも「家宝」といえるものがあるのか。そんな素朴な疑問が発せられたらどうだろう。私は即座に「YES」と答える。そもそも家宝とは、自身の価値観であって、

他者と競い合うものではない。個々人が各家にとって大切なものと規定し、その思いと共にモノが大切だと相伝、継承されれば、それは立派な「家宝」といえる。県指定三線の一名「安室開鐘」と呼ばれる三線の棹には、「譲子孫」と記されたり、18世紀の王国時代の遺言状には、「真壁里之子（製作）の二挺の三線は絃音が良く、（家宝として）子孫へ相伝しなさい」と書き付けされる。

一方で、個人の意思を離れて、より客観的に「お宝」と呼ばれるものがある。公の地域の機関によって指定を受けた文化財がある。その呼称はそれぞれ異なる。国家（日本）を代表する場合には、「国宝」や「重要文化財」と呼ばれる。また都道府県を代表する場合もある。本県だと、「沖縄県指定有形文化財」と呼ばれる。さらに、市町村指定の文化財がある。これら文化財は、日本を代表したり、各地域を代表するもので、それぞれの地域の皆さんが大切だと考え、保存し、後世に引き継ぐ必要があることを認めたものである。これらは、社会的（法律的）に決められた、地域の「お宝」といえる。

もともと、様々な有形のモノは一義的には個人または団体に帰属する性質をもっている。戦前の沖縄には、国宝建造物が22件あった。それらは、琉球王国時代の遺された施設であった。廃藩置県後は、その代表格である首里城は当時の首里市に払い下げられ、首里市の所有物になった。また、王国時代の巨刹であった円覚寺や、冊封使が先王諭祭を執り行った崇元寺は旧琉球王家・尚家の私寺になった。残念ながら、戦禍によって殆どが消失した。

戦後、1954年（昭和29）に琉球政府文化財保護法が公布され、いちはやく特別重要文化財として「開鐘」（翁長、志多伯、湧川）とよばれる三味線（三線）３挺が指定され、昭和33年までに合計11挺の三線が重要文化財として指定された。これらの三線は、基本的には個人が所蔵し、当時の琉球政府のいわば「国宝」とよばれる存在であった。

沖縄戦禍をくぐったことの意義

再び、先ほどの質問にもどりたい。人は命の危険にさらされる時には、着の身着のままで逃げざるを得ない。沖縄戦の頃、前年の十・十空襲の被害によって、戦争が近づいていることを、人々は体感したが、その後もこれほどの大規模な地上戦が繰り広げられるとは想像していなかった。本島中南部の人々は、それ以降、本格的に本土（九州）や本島北部へ疎開し始めた。避難することができなかった人々は、日米軍の戦火に巻き込まれ、米軍の侵攻によって南部へと追い詰められていった。命の淵に立たされた人々は、自身にとって大切なモノだけを持って逃げる。それらは生きるための、心の支柱となるモノでなくてはならない。お金であったり、食べるものであったり、着けるモノであった。さらに加えて、ウチナーンチュは、位牌（イフェー）と三線棹を担いだという。

「鉄の暴雨」に形容される艦砲弾が撃ち込まれる中で、家宝とされる三線棹を担いだ人々が右往左往した。人々にとって、命と同様に三線が重要であったことを物語る。戦後、焼け野原で三線の棹を拾ったという話を聞く。沖縄の三線を代表する旧王家伝来の盛嶋開鐘ですら、戦後行方不明になった。取得した人の話によると、爆風で飛ばされて土に埋もれていたという。それを携帯して逃げ回っていた持ち主は命を失ったことを暗に示す。戦禍をくぐってきた文化財は、このような「カンポーヌクゥヌクサー（艦砲射撃の喰い残し）」であり、まさに九死に一生の奇跡によって存在したことを私たち

は自覚しないといけない。

門外不出の家宝三線

元々三線は家宝であるがゆえに、むやみに人様に披露するものではなかったと思える。地方に行くと、貸出し用と門外不出の二種類が存在したことを聞くことがある。三線の家屋の中での居場所は、一番座（客室）にある床の間という最もよい場所を与えられている。収納用の三線箱も配置される。江戸時代の茶道家であり庭師でもあった小堀遠州は『古今茶道全集』の中で、琵琶同様、琉球三味線も床の間飾りとして適当である旨を記している。いつから、家宝三線を床の間に飾るようになったのかは不明だが、家屋の中で三線の居場所が規定されることの起源と思われ、興味深い。床の間は、客を楽しませるその家のステータスを示し、小さな展示空間の場でもあった。

三線が不特定多数の人を対象に「展示」されるようになったのは、1929年（昭和４）の旧諸大名家のお宝を全国から集め当時の東京府美術館で開催された展覧会「日本名寶展」を嚆矢とするのかもしれない。その後には、1939年（昭和14）に首里城南殿で三線江戸与那の供養祭を行った際に、首里・那覇の名器も合わせて展示されたことが古い。供養祭当日の様子を、東恩納寛惇は「三味線考」の中で、次のように描写している。

> 「持主の諸人が紋服の礼装いかめしく、三味線箱肩に、歓会門指して登っていく状は、近来にない珍しい光景であった。尚家御秘蔵の盛島（嶋）開鐘は、天下に著聞した逸品で、若し出るとなれば、輿に乗り、家職附添と云う仰山な事にならうとの噂であったが、これだけは、文字通り門外不出であった。」

楽器としての本分－音の弾き比べと棹信仰

三線の部位は棹と胴で構成され、本来この二つは密接不可分の関係、いわゆる「唇歯」の関係というべきものであるが、現代の人々は、その二者択一を迫られたら、迷いなく棹を選ぶにちがいない。そのような考え方がいつ頃から出始めたのかは、不明である。三線調査でも、特に調査員に委嘱された実演家の先生方の棹に対する執着心はきわめて強かった。三線の音は、「棹で奏でることができる」という。このことはまるで信仰のような思いが垣間見える。

1900年（明治33）の琉球新報の記事に、廃藩置県後の旧士族層の三線の音色を競う記事が掲載されている。首里と那覇の名器三線の競鳴のための「三味線会」という催しである。

それぞれ10挺ずつ出演してもらい、２挺ずつ襖ごしに音を鳴らしてもらい、どちら良い音か、と各６人（合計12人）で音の判定を行うという、きわめて民主的な手法の三線遊びである。演奏者もそれぞれのチームで自身の三線を弾いた。その記事では、「首里が二つ負けた」と記し、それぞれの勝者の三線名が記される。首里代表の敗戦の弁がふるっている。「（この勝負に）負けたのは、ツーガ（胴）が負けた」という。負け惜しみもここまでくると、愉快である。もちろんチーガの蛇皮の張り方によって、三線の音色は変わる。今から120年前の三線大工（職人）組合の賃金表が新聞に掲載されている。その筆頭には、「蛇皮張り手間賃　四十銭」と記されるほどだ。また、胴木枠（ツーガ）

製造費も上等、中等、下等の３ランクに分けられ、それぞれ70銭、50銭、30銭と手間賃が違い、手間賃の中で最高額がツーガ製造費である。おそらく、内部の音響的効果が得られるような細工の有無や材質等の差異によるものだと思える。棹製作の記載は記されないが、当時の三線職人にとっても、蛇皮張りの仕事や胴製作は主要な収入であったことがわかる。この話は、当時の人々の三線音へのこだわりの強さを感じることができる事例である。いずれにしても、苦し紛れの敗戦の弁には、実は深読みすると二つの意味が隠れている。一つ目は文字通り、共鳴体としての胴の存在の重要性について言及していること。二つ目に棹信仰で、家宝三線の本質は棹であるため、家名を汚す致命傷を回避するための方便になっていることである。後者だと考えると、明治時代のウチナーンチュもすでに棹信仰を持っており、その考え方は特に近代になって始まったのでなく、王国時代からあったと考えた方が適当だと思える。

「銘書き」棹・胴三線の意味すること

三線の中には、ごく稀に銘が記された三線棹や胴がある。ここでは「銘書き三線」と呼ぶ。銘の書き方にも作法があるように思う。棹は芯部分に記される。三線の名称や、所蔵家（出自を表す）「御殿」名が記されることがある。棹の芯部分は四角形に加工され、四面に記されることがある。書き方にも４種類の作法がある。朱書き、箔書き、彫り、さらには彫りに加え、その彫った部分に朱や箔の色をさす場合である。

一方、胴の言い分も聞く必要がある。胴には、棹以上の書き込みがされていることが最近わかってきた。胴への書き方込みの作法がある。朱書きではなく、少例だが、墨書きのみが確認される。胴の書き込みは、現在４件が確認される。棹の18件に比べると極端に少ない。その数字が語る意味は、棹偏重によって、虐げられてきた差異というべきかもしれない。蛇皮張りにはデンプンからグルテンを抽出し、乾燥させて作るスックイを還元して接着材として用いる。そのため、三線の部位で最も虫の餌食になりやすいのが胴であった。虫食いにあった胴は、蛇皮だけ取り除くより、総替えをした方が合理的であり、三線職人にとっても大きな収入源になった。それゆえ、消耗品扱いの不遇な目にあい、製作者や製作年を記録した歴史資料としての価値を有した胴が消失してしまったと考えることができる。

現在確認できる古い銘書き胴は、当館所蔵の「三線盛嶋開鐘附胴」（県指定）と源河ウェーキ三線に加え、本年確認された徳之島旧阿権村尚（たかし）家（直富主）に伝来する三線と那覇市歴史博物

図１　盛嶋開鐘の胴内銘書き

図２　源河ウェーキ(1)
胴内上部の銘書き

図２　源河ウェーキ(2)
胴内三時の方角の銘書き

館が所蔵する古典音楽大家金武良仁が松山御殿からもらった三線の４挺を数える。記される内容には製作年がある。盛嶋（図１）には「咸豊拾年庚申八月吉日」、源河（図２）には、「咸豊三年癸丑二月吉日)、直富主には「道乙酉」、金武には「明治四拾二年十一月九日吉日」とある。また、製作者も記されている。渡慶次筑親雲上、蒙氏糸数（糸数昌常)、渡慶次、昌煌と記される。さらに、金武の胴には、「壹石三味線地加造」（図３）と記される。加えて、胴内部には細工が施されたものもある。とりわけ盛嶋には複雑な凹凸の細工が施される。現在の確認できる最古の胴の銘記は、徳之島伝来の三線（図４）で、道乙酉とは道光５年(1825）を意味し、咸豊10年（1860)、咸豊３年（1853)、明治42年（1909）より古い。

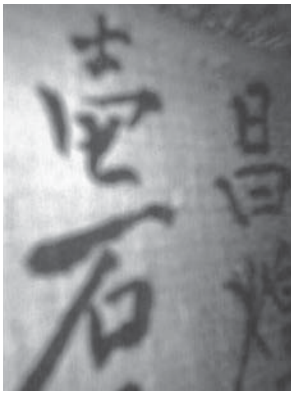


図３　金武家三線(1)
胴内三時の方角の銘書き (2)

図３　金武家三線(2)
胴内三時の方角の銘書き

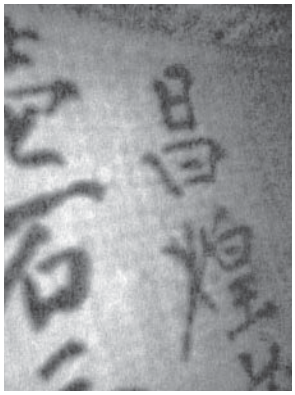


図３　金武家三線(3)
胴内三時の方角の銘書き

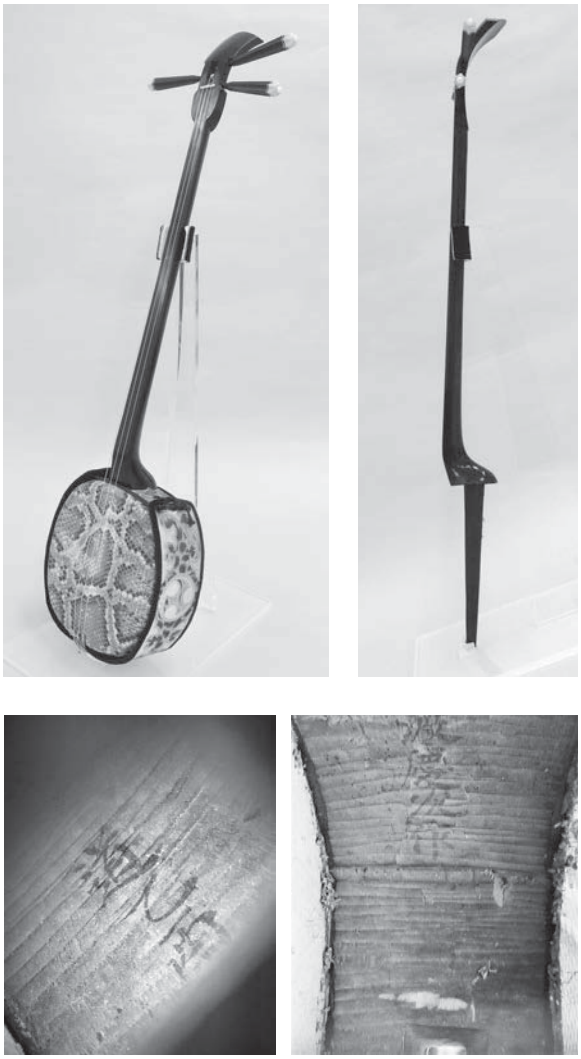


図４　徳之島旧阿権村の尚（たかし）家伝来の三線（上）と胴内部の銘書き（下）

両手で柏手を打ったときに、その音は、右手から出たものか左手から発したものであるかを議論することはナンセンスと、ある高名な実演家は紹介した。まさに正答である。両手によってのみ発音したことが事実である。三線も同様である。棹で鳴らしたか、胴で鳴らしたかを議論することは不毛である。唇歯の関係にある棹と胴は密接不可分であり、その両立によって良い音が創られる。４例の胴銘書き三線は、約200年の歴史を超えて、その意味を私たちに示すとともに、ヤーヌタカラ（家の宝）から、シマの宝、さらには県の宝、ひいては国の宝になることを夢見ている。

園原謙（沖縄県立博物館・美術館　副参事兼博物館班長）

三線関連略年表

西暦	琉球	日本	事項
1392	察度 43	明徳 3	閩人三十六姓が帰化。『球陽』（1745 年）には「始メテ音楽ヲ節シ礼法ヲ制ス」とあり、閩人によって三絃音楽と調絃法が伝わったとされる。
1403	武寧 8	応永 10	琉球国舟六浦に漂来、船中音楽の声あり（『南方紀傳』）
1534	尚清 8	天文 3	「楽ニ絃歌ヲ用フ。音頗ル哀怨タリ ……」「四夷童ヲシテ夷曲ヲ歌ヒ、夷舞ヲ為サシメ ……」（『使琉球録：陳侃』）
1558～1570	尚元 3～15	永禄年間	この頃、琉球より大阪の堺に三線が渡来すると思われる。「永禄年中に琉球国より是（三味線）を渡す ……」（『糸竹大全奴佐』1699 年）
1575	尚永 3	天正 3	尚永王の使者金武大屋子一行が薩摩において徳永源五左衛門尉宅で「しやひせん」を演奏してきかせた。（『上井覚兼日記』）
1606	尚寧 18	慶長 11	「楽器ニ金鼓、三絃等ノ楽アルモ、但々不善ノ作多シ。嘗テ吾ガ随従者ヲ借リテ之ヲ教フ。亦土戯アリ ……」（『使琉球録：夏子陽』）
1610	〃 22	〃 15	尚寧王一行が薩摩の川内新田八幡宮に参詣して「三絃の秘曲」を奉納する。（『喜安日記』）
1612	〃 24	〃 17	毛泰運（保栄茂親雲上盛良）を貝摺奉行に任命し、三線打匠夫（三線製作者）の指導を管掌させた。「毛泰運（保栄茂親雲上盛良）命を奉じて、貝摺奉行に任じ、兼ねて、絵師・檜物師・磨物師・木地引・御櫛作・三線打・矢作等匠夫の事を管す。然り而して、此れ等の匠は、何れの世より始まるか、得て詳かにすべてからざるなり」（『球陽』）
1664	尚質 17	寛文 4	「抑日本に三味線を弾き初めし事は、文禄の頃ほひ、石村検校といふ琵琶法師あり。心たくみにして器用無双の者也。ある時琉球の島に渡りけるに、彼の島に小弓といひて糸三筋にて鳴らす物あり ……」（『糸竹初心集』）
1693	尚貞 25	元禄 6	「琵琶、琴と同様に琉球三味線を荘（かざ）る事あり。撥は不荘（かざらず）」（『古今茶道全集』）
1703	〃 35	〃 16	「文禄の比、琉球より蛇皮二絃の楽器渡り、和泉の国境にすめる琵琶法師中小路が手につたへ、長谷の観音の霊夢によりて一絃まし、三絃とせしを、世に三味線と呼て……」（『松の葉』）
1710	尚益 1	宝永 7	はじめて三絃匠主取が設置され、知念が任命された。「往昔の世、素、三絃有り。未だ何れの世にして始まるかを知らざるなり。近世に至り、南風原なる者有り。善く三絃を製す。其の韻声嫋々として絶えず。遠く四境に聞こえて、世の三絃と音声相異るなり。今、亦、知念なる者有り。善く三絃を造り、是の年に至り、擢られて其の主取と為る。」（『球陽』）
1700年代			『屋嘉比工工四』なる。屋嘉比朝寄（1716～1775）編纂。
1719	尚敬 7	享保 4	玉城朝薫組踊を作り、上演。
1721	〃 9	〃 6	「楽工十四人アリ。…… 楽器ヲ持ツ。三絃二・堤琴一。＜即チ三絃ヲ用イテ弓ヲ上ニ着ス＞三絃ノ槽柄ハ、中国ニ此スルニ短キコト半尺許。……」（『中山伝信録』）
1795	尚温 1	寛政 7	琉歌「歌と三味線のむかし初や　犬子音揚の神の御作」（『琉歌百控』）
1796	〃 2	〃 8	島津家が徳川尾張公に琉球楽器（三線長短 2 種類含む）を献上。
1869	尚泰 22	明治 2	『野村工工四』なる。野村安趙（1805～1871）ら編纂。
1912		〃 45	『安富祖流工工四』なる。安室朝持（1841～1916）により編纂。
1929		昭和 4	日本名寶展覧会で旧琉球王家の尚家の家宝を出品。この中に尚家伝来の蛇皮線 2 挺が展示された。
1939		〃 14	東恩納寛惇が東京で「江戸与那」を見つけて沖縄に持ち帰ったのを機に、首里城南殿で首里・那覇名器 24 挺を加えて、「三味線祭」が催される。
1945		〃 20	沖縄で地上戦。三線をはじめ多くの文化財が戦禍を被る。
1952		〃 27	池宮喜輝、「移民地における三味線調査」を実施。
1954		〃 29	池宮喜輝、『琉球三味線寶鑑』を著す。
1955		〃 30	琉球政府文化財第二次指定において、三味線 3 挺が特別重要文化財に指定される。名称は「三味線」。
1956		〃 31	三味線「江戸与那」が重要文化財に指定される。
1958		〃 33	三味線 9 挺が重要文化財に追加指定。
1986		〃 61	琉球三線楽器保存・育成会結成。（初代会長・宮里春行）
1988		〃 63	特別展「三線名器 100 挺展」を沖縄県立博物館で催す。
1989～1992		平成 1～4	沖縄県教育庁文化課が、文化庁補助事業として「（沖縄）県内所在琉球三味線調査」を実施。
1992		〃 4	沖縄県三味線製作組合結成。（初代組合長・照屋政雄）
1993		〃 5	沖縄県文化財調査報告書第 110 集『沖縄の三線』（沖縄県教育委員会編集）。
1994		〃 6	三線 9 挺が新たに沖縄県の有形文化財に指定。名称を「三味線」から「三線」に改定。
1999		〃 11	特別展「三線のひろがりと可能性」を沖縄県立博物館で開催。
2012		〃 24	三線が沖縄県の伝統工芸製品に指定。
2014		〃 26	企画展「三線のチカラ－形の美と音の妙－」を沖縄県立博物館・美術館で開催。
2018		〃 30	三線が国の伝統工芸品に指定される。
2019		〃 31	琉球三線楽器保存・育成会創立 30 周年を記念して、企画展「沖縄が誇る家宝の三線展」を沖縄県立博物館・美術館で開催。（2 月 5 日～3 月 10 日）

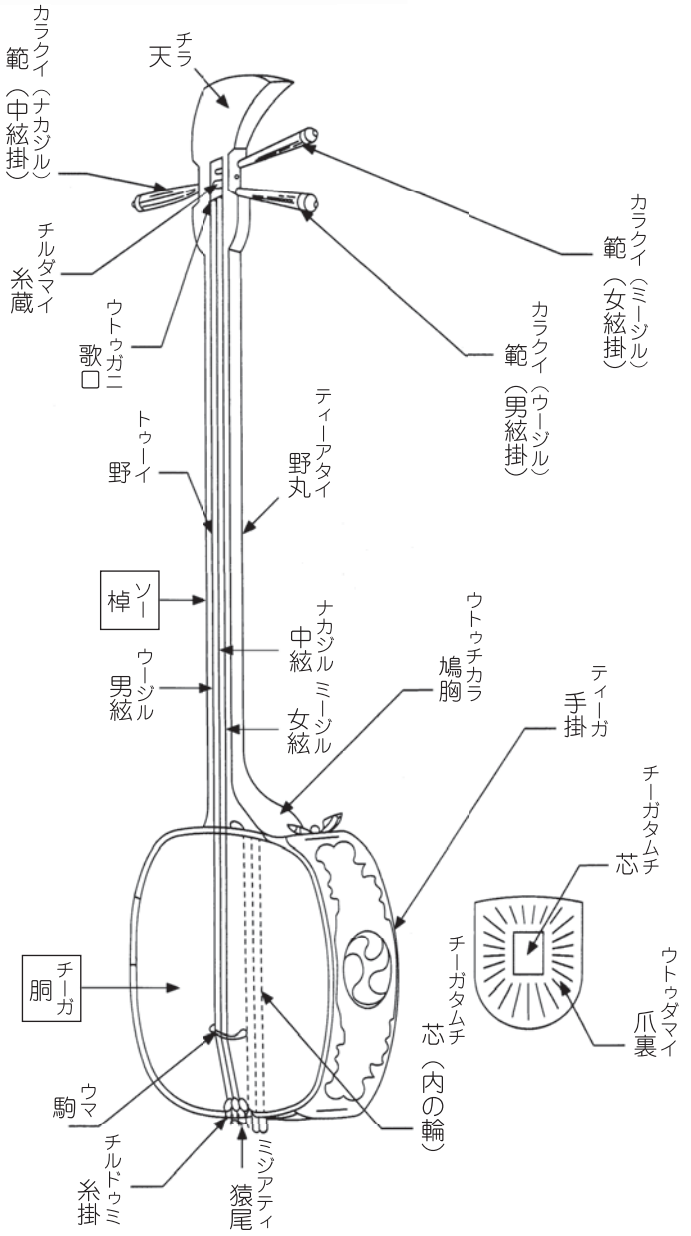
※この年表は、『三線名器100挺展』及び『特別展　三線のひろがり』の図録に掲載された年表を参照し、加筆したものである。

三線　部位の名称・素材・型について

三線の部位

三線の骨格は、棹（ソー）と胴（チーガ）からなる。三線の音色や価値は、棹で決まると言われている。

このほか、絃（チル）、範（カラクイ）、駒（ウマ）、糸掛け、手掛（ティーガー）、爪（チミ）が付属する。



三線の素材

①棹（ソー）　年月が経過しても反りや狂いが生じにくい黒檀（クルチ）が珍重されている。
その他、イスノキ（ユシギ）、紫檀、縞黒檀（カマゴン）等がある。

②胴（チーガ）　主にイヌマキ（チャーギ）が用いられる。

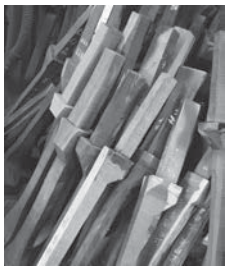
③絃（チル）　古くは絹製。現在は、テトロンかナイロン製が普及している。

④範（カラクイ）　黒檀等に牛骨、ラクト材、象牙、プラスチック等で装飾。

⑤駒（ウマ）　モウソウチクや牛骨等。

⑥爪（チミ）　義甲のこと。水牛や牛の角、エナメル製等あり。

⑦手掛（ティーガー）　胴回りに取り付ける装飾的な布。



7つの型

沖縄の三線は、棹の形状から大まかに７つの型に分類される。
それぞれの型は、元となった三線の製作者の名を冠している。
型の古い順に、南風原型、知念大工型、久場春殿型、久葉の骨型、真壁型、平仲知念型、与那城型となる。

①南風原型（フェーバラー）

名工　南風原作

・最も古い型
・棹が細身で天の曲がりが少ない
・野坂は大きく曲がる

②知念大工型（チニンデーク）

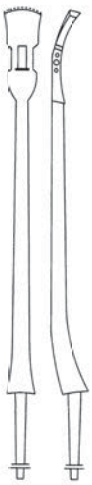
初代三絃主取の知念作

・棹は太め
・天が広く曲がりが大きい。中央に稜線がある。
・鳩胸が盛り上がる

③久場春殿型（クバシュンデン）

久場春殿作

・南風原の系統
・最も太い棹
・天は扁平で曲がりが少ない。
・野丸と鳩胸の区別ができない



④久葉の骨型（クバヌフニー）

久場春殿作

・最も細い棹
・南風原型をひとまわり小さくした感じ

⑤真壁型（マカビ）

名工　真壁里之主作

・棹は細身
・天は中弦から曲がる
・糸蔵が短い
・開鐘（けーじょー）と呼ばれる三線は、ほぼこの型

⑥平仲知念型（ヒラナカチニン）

名工　平仲作

・棹は細身
・天が大きく曲がり、中央がやや盛り上がる
・鳩胸に丸みがない
・知念大工型の系統

⑦与那城型（ユナー）

名工　与那城作

・棹は太め
・天は糸蔵の先から曲がる
・糸蔵が長め
・鳩胸も大きめ

育成会会員に聞く！ 三線Q＆A

Q1 鑑定会の中で発見された名器珍品の時代や型などを分類すると、何か特徴的なことが言えますか？

王府、明治、大正、昭和一桁年代の三線は、全体的にやや小ぶりで、木の縦横や、曲線、各部位は似ていると思う。昭和中期より以降の三線は、全体的にやや大きくなっている。三線製作者の個性が良く出ている。

Q2 三線保存・育成会の活動についてどう思いますか？

由来、歴史のある三線を表に出す場所として、鑑定した三線の値打ちを依頼者に知っていただき、末代まで家宝として残していただくことを望み、育成会に参加している。
三線製作者の方々へは、時間の許す限り鑑定会へ足を運んでいただき、先生方の三線話や多くの三線を見て知識、技術の向上につなげてほしいと思っている。

Q3 歌の曲調によって三線は使い分けるか？

三線の音が高いか低いかは、皮張りの強弱であり、三線の音質は棹の材質による。曲調によって三線の音質や声の高低で使い分けている方はいると思う。

Q4 演奏者の好みによって型が選択されるか？

三線の好みはあると思う。（演奏者）お客様からの見た目で、三線の型を選んでいる方はいると思う。余興などでは、いろいろな型の三線を弾いている。

Q5 手の大きさ、男女の違い、演奏目的などによって三線の型は違うのか？

手の大きさで言えば、野丸（ティーアタイ）の太い細いを気にする方はいる。男女の違いはないと思うが、男性は三線の顔（チラ）が力強く、勢いのある三線を好む方が多い。女性は、全体的にやや細めの三線を購入する方が多い。演奏目的などによって三線の型は違うのかという問いかけですが、Q３、Q４の意見で良いのではないか。

Q6 木の材質や文様の意味は？

材質では、クルチは硬く、ユシギ等は軟らかい。硬い材質の三線の音は、芯の通った直線的な音だと思う。軟らかい三線は、芯のある横広がりの音だと思う。木の文様には、板目、柾目、虎目がある。板目、虎目は横文様があり、棹製作中や仕上げ後に棹が変形することがある。柾目は、まっすぐな木目で棹の変形が少ない。三線購入者は、（トゥーイからチラの文様は）板目文様の棹を選ぶ方が多い。

Q7 時代によって流行した型はあるのか？

時代によって流行した三線はないと思うが、主流は真壁型、与那城型だと思う。近年、演奏会に行くと、縦が長い与那城（江戸与那）型をみかけるようになった。

Q8 三線は生活の中でどう使われたか？

歌三線の話題での家族の心の通じ合い。三線サークル、老人センター、公民館、施設、宴席等での語り合いや、人と人を結ぶ役目をしている。

Q9 三線を未来につなげるためには？

多くの人に沖縄の文化・芸能を知っていただくこと。人の集まっている場所、注目されているところでの歌三線、琉舞等の公演をする。空手世界大会、国内大会、各流派の大会、東京オリンピック空手会場での歌三線、琉舞（武の舞い等）の公演をする。小中高学校の授業に、歌かぎやで風を入れる。各団体の音楽コンクール等で新人賞の演目にかぎやで風を入れる。新人賞コンクールの衣裳は、かりゆしウェア、スーツでも良いとする。優秀賞から正装とする。

◎以上、上江洲会員に聞きました。

第4章

琉球三線楽器保存・育成会のあゆみ

琉球三線楽器保存・育成会は1986年（昭和61）に設立し、一昨年に創立30周年を迎えました。設立当初の会員は数名で、現在ではかなり入れ替わりましたが、当初の目的である三線の資料調査、研究及び保存・育成にかかる活動を続けてきました。本章では、育成会のあゆみを振り返り、会の活動や会員各自の思いをコラムにして掲載します。

琉球三線楽器保存・育成会の会員（2018年10月24日撮影）

前列左から：高江洲昌市（書記）、銘苅 春政、宜保榮治郎（会長）、照喜名朝一（副会長）、仲嶺 盛文
後列左から：新垣 萬善（副会長）、渡慶次道政、岸本 尚登、宮城　赳、大湾 朝重、前原 信喜、宮里 敏則、上江洲義昭

琉球三線楽器保存・育成会のあゆみ

琉球三線楽器保存・育成会（以下、「育成会」と記す。）は、1986年（昭和61年）８月11日に沖縄県立博物館（当館の前身の機関）において設立した。その目的は、琉球三線楽器及びこれに関連のある諸楽器の保存、育成、調査、研究を行うことである。設立当初、沖縄各地に散逸する三線の名器を集めて科学的な資料を作成したいという沖縄県立博物館の要望に応えて、三線の実演団体である野村流及び安冨祖流の会長・副会長を務められた先生方が集まって結成した。主たる活動は、鑑定会の実施で、沖縄県立博物館時代は、館内の会議室の一角を使って月１回鑑定会を開き、毎回３挺から５挺の三線を鑑定した。発足時の会長は、安冨祖流絃聲会名誉会長の宮里春行氏で、1992年（平成４年）から野村流音楽協会会長の島袋正雄氏が就任した。また、博物館が移転した2008年（平成20年）からは、安冨祖流絃聲会名誉会長の岸本吉雄氏が会長に就任し、沖縄県立博物館・美術館の実習室で月に１回、第四水曜日を定例に鑑定会を実施している。

育成会のこれまでの活動については、育成会から提供された会誌等の資料や会員の話から、略年表を作成した。残念ながら、1995年以前の資料は、個人宅で資料を保管していたため一部しか残っていないが、育成会のこれまでの活動内容は、おおよそ下記に示すことができた。

育成会では、最初の２年間ですでに100挺を超える資料を鑑定し、その中から名器100挺を選んで、1988年に初の三線展を開催した。また、1989年から1992年まで沖縄県教育委員会が文化庁補助事業として実施した「(沖縄）県内所在琉球三味線調査」においては、当時の宮里会長をはじめ多くの会員が調査員として協力し、宮古島や八重山諸島等にまで赴いて三線の記録を採っている。その後、1999年と2015年にも博物館の企画展として三線に関する展示会を共催し、さらに、2003年から2008年まで琉球放送主催のサンシンの日のイベントで、鑑定会を実施したり、2011年には社団法人沖縄県対米請求権事業協会の南米調査に協力し、2012年から２年間は、平成24年度地域振興助成研究として、「三線の型の正型と名器の音色分析」研究を博物館の園原謙と協力し、実施した。

2016年度に30周年を迎えたことを機に、育成会が行った鑑定記録を集めてリストを作成したところ、設立当初から1994年頃までの8年間の記録は断片的にしか残っていないため、すべてではないが、それでも1000挺以上の三線を鑑定したことが明らかになった。このほか、1994年12月の記録で、鑑定会を118回開催し、555挺の鑑定書を作成したとの記録があるので、実質的には、1500挺前後の三線を鑑定したと思われる。これらの中には、沖縄戦という悲惨な戦争をくぐり抜けた三線も多く含まれており、戦争中も肌身離さずに持って逃げた人びとの三線への思いをひしひしと感じることができる。

【育成会の略年表】

1986年８月11日	琉球三線楽器保存・育成会の設立（沖縄県立博物館にて)。会長宮里春行、副会長島袋正雄、会員数16名で発足。
1988年11月１日～ 11月27日	昭和63年度博物館特別展「三線名器100挺展」に全面協力。

1989年～ 1992年	県（文化庁補助事業）の「(沖縄）県内所在琉球三味線調査」に協力。 宮古島調査、八重山諸島調査（島袋正雄・比嘉常俊・宜保榮治郎）久高島調査（島袋正雄・比嘉常俊・大城學)。 県教育委員会発行の『沖縄の三線』（平成４年度沖縄文化財調査報告書第110集）を、育成会が500冊を再版、複製した。
1993年12月21日	沖縄県文化財保護審議会が三線９挺（盛嶋開鐘附胴、富盛開鐘附胴、真壁型銘西平、真壁型銘安室、亀千代愛用真壁型、伊佐川世瑞愛用真壁型、平仲知念型銘時受、桑江良慎愛用糸蔵長与那型、玉城與那型玉城与那）を県指定有形文化財に答申。指定にいたるまでの調査に育成会が全面協力。
1994年１月27日	石川市教育委員会主催、石川市指定文化財三線３挺を調査、答申指定に全面協力。他、読谷村、嘉手納町。
1999年８月３日～９月５日	平成11年度博物館特別展「三線のひろがりと可能性展」開催（共催)。 ・三線鑑定会２回開催（８月29日・９月５日)。
1999年９月30日	沖縄県議会及び沖縄県教育委員会に「沖縄県に琉球三線楽器の保存育成のため公的制度を設置していただきたい」という要請文を提出。
2000年４月６日前後	琉球放送のニュース番組の一部で「三線鑑定団」放映。
2003年～ 2008年３月４日	琉球放送の依頼でサンシンの日に読谷鳳ホールでの鑑定会実施。
2011年７月４日～８月４日	社団法人沖縄県対米請求権事業協会主催の南米（ブラジル・アルゼンチン・ボリビア・ペルー）の三線調査に参加し、三線114挺を調査（岸本吉雄・外間善盛・岸本尚登)。
2012年２月25日～３月18日	宮古島市総合博物館の「さんしん展」にて三線鑑定会開催（岸本吉雄・外間・上江洲)。
2012年４月～ 2013年２月	社団法人沖縄県対米請求権協会の平成24年度地域振興助成研究として、「三線の型の正型と名器の音色分析」研究を博物館の園原謙と協力し実施。 ・三線のサンプル音の録音のための三線の複製と演奏等。 ・報告書『三線の型の正型と名器の音色分析』の出版。
2015年２月18日～５月11日	平成26年度博物館企画展「三線のチカラ ―形の美と音の妙―」開催（共催)。
2017年５月	琉球三線楽器保存・育成会創立30周年記念事業実行委員会設置。
2019年２月５日～３月10日	平成30年度博物館企画展 琉球三線楽器保存・育成会創立30周年記念「沖縄が誇る家宝の三線展」開催（主催)。

（文責：大湾ゆかり）

【構成員】

■1986年８月11日設立

会　長　宮里春行
副会長　島袋正雄
会　員　宮城嗣周　又吉真三　玉栄昌治　宜保榮治郎　岸本吉雄　又吉元喜　新垣正次郎
　　仲本賢次郎　照喜名朝一　宮平三栄　安冨祖竹久　友利安徳　大城助吉
事務局　比嘉常俊

■1993年４月１日

会　長　島袋正雄
副会長　岸本吉雄
会　員　宮平三栄　宜保榮治郎
　　玉栄昌治　仲本賢次郎
　　下田清幸　照喜名朝一
　　花城康栄　上原三郎
　　新垣萬善　運天政宣（大城助吉）
事務局　比嘉常俊

首里の県立博物館での鑑定会メンバー
前列左から 比嘉常俊、島袋正雄、宮平三栄、岸本吉雄
後列左から 新垣萬善、花城康栄、照喜名朝一、外間善盛、銘苅春政

■1998年４月１日

参　与　宜保榮治郎
会　長　島袋正雄
副会長　岸本吉雄
監　事　玉栄昌治　照喜名朝一
会　員　宮平三栄　仲本賢次郎
　　上原三郎　花城康栄
　　新垣萬善　運天政宣
　　下田清幸　外間善盛
　　銘苅春政
事務局　比嘉常俊

鑑定している照喜名先生

鑑定している島袋先生

■2008年

会　長　岸本吉雄
副会長　外間善盛
監　事　照喜名朝一　新垣萬善
会　員　島袋正雄　花城康栄　銘苅春政　玉城政文
事務局　高江洲昌市　平良昭隆
賛助会員　岸本尚登　上江洲義昭

おもろまちの博物館での鑑定会の様子

■2013年４月24日

会　長　岸本吉雄
副会長　外間善盛
監　事　照喜名朝一　新垣萬善
会　員　島袋正雄　銘苅春政　国吉正泰　玉城政文　上江洲義昭　岸本尚登
事務局　高江洲昌市　平良昭隆

■2016年４月１日
会　長　岸本吉雄
副会長　外間善盛
監　事　照喜名朝一　新垣萬善
会　員　島袋正雄　銘苅春政　上江洲義昭
　　岸本尚登　宮里敏則　仲嶺盛文
　　渡慶次道政　前原信喜　宮城赳
　　大湾朝重
事務局　高江洲昌市

おもろまちの博物館で、育成会のメンバー（2016年）
前列左から　高江洲昌市、新垣萬善、外間善盛、照喜名朝一、銘苅春政
後列左から　渡慶次道政、岸本尚登、宮城赳、宮里敏則、仲嶺盛文、前原信喜、上江洲義昭

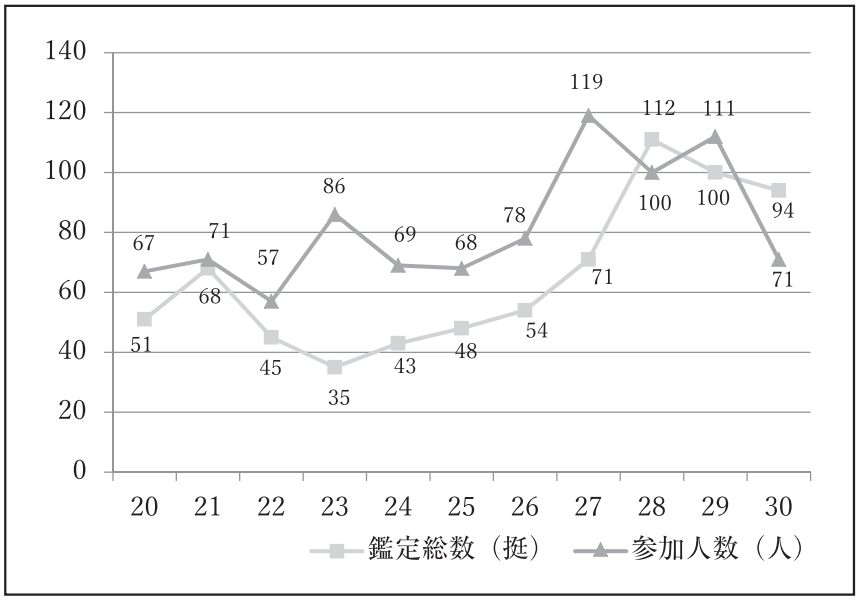
■2017年４月１日
参　与　宜保榮治郎
会　長　岸本吉雄
監　事　照喜名朝一　新垣萬善
会　員　島袋正雄　銘苅春政　上江洲義昭　岸本尚登　宮里敏則
　　仲嶺盛文　渡慶次道政　前原信喜　宮城赳　大湾朝重
事務局　高江洲昌市

■2018年４月１日
会　長　宜保榮治郎
副会長　照喜名朝一　新垣萬善
会　員　銘苅春政　上江洲義昭　岸本尚登　宮里敏則　仲嶺盛文
　　渡慶次道政　前原信喜　宮城赳　大湾朝重
事務局　高江洲昌市

現在の鑑定会の様子

【平成20年度～ 30年11月までの鑑定数】
鑑定総数　720挺　　鑑定会参加人数　898人

平成	鑑定総数（挺）	参加人数（人）
20	51	67
21	68	71
22	45	57
23	35	86
24	43	69
25	48	68
26	54	78
27	71	119
28	111	100
29	100	112
30	94	71



鑑定記録が揃っている2008年度（平成20年度）から2018年（平成30年）11月までの鑑定数を表記した。近年、鑑定数は増加傾向にある。

琉球三線楽器保存・育成会の活動の一例

－島袋正雄・比嘉常俊両先生との思い出－

沖縄戦は、多くの人命に加え、沖縄が誇る有形無形の文化財も失わせ、傷つけた。戦後、昭和29年に琉球政府の文化財保護法が公布され、いちはやく昭和30年から33年にかけて11挺の三（味）線が文化財として指定された。その根拠になったのが、池宮喜輝の『琉球三味線寶鑑』（昭和29年刊行）であった。同書では、ハワイやロス、南米、本土の在外や県内所在の名器三線300挺余りが紹介されている。

私が県文化課（現文化財課）に勤めたのは平成３年10月からであった。美術工芸（文化財調査や指定）、無形文化財（工芸技術）、県内博物館指導、在外文化財調査、銃砲刀剣登録の主に５つの業務を担当した。その業務の中には、文化庁補助事業「県内所在琉球三味線調査」事業が含まれており、翌年の平成４年度には、約400頁の報告書を製作するノルマが課された。この調査は、池宮調査も踏まえつつ、戦後の生き残った県内所在の古三線の悉皆的かつ実態調査を行うことが目的であった。三線については無知であった私の三線学習がその時から始まった。その指南役が島袋正雄・比嘉常俊両先生であった。

表1　平成３年度の三線調査一覧

NO	期間	調査日数	場所	三線件数	工工四	調査参加者数	参加者名
1	10月21日(月)	1				9	平成３年度委嘱状交付式（９人参加）
2	10月28日(月) 10:00 ～ 12:00	1	県博	10		7	島袋正雄、比嘉常俊、岸本吉雄、新垣正次郎、玉栄昌治、渡慶次哲三、園原謙
3	11月14日(木)	1	名護博物館	20	5	8	島袋正雄、比嘉常俊、岸本吉雄、新垣正次郎、渡慶次哲三、比嘉武則、大城學、園原謙
4	11月15日(金)	1	恩納村コミュニィティセンター	6		7	島袋正雄、比嘉常俊、岸本吉雄、新垣正次郎、渡慶次哲三、大城學、園原謙
5	12月２日(月) 10:30 ～ 16:00	1	本部町中央公民館	26		7	島袋正雄、比嘉常俊、岸本吉雄、新垣正次郎、玉栄昌治、渡慶次哲三、園原謙
6	12月３日(火) 10:00 ～ 15:00	1	伊江村農村改善センター	14		7	島袋正雄、比嘉常俊、岸本吉雄、新垣正次郎、玉栄昌治、渡慶次哲三、園原謙
7	12月12日(木) 9:30 ～ 17:00	1	西原町中央公民館	25	1	7	島袋正雄、比嘉常俊、岸本吉雄、新垣正次郎、玉栄昌治、渡慶次哲三、園原謙
8	12月16日(月)	1	県博	7		7	島袋正雄、比嘉常俊、岸本吉雄、新垣正次郎、玉栄昌治、渡慶次哲三、園原謙
9	１月13日(月) 9:00 ～ 14:00	1	県博	11		7	島袋正雄、比嘉常俊、岸本吉雄、新垣正次郎、玉栄昌治、渡慶次哲三、園原謙
10	１月20日(月) 13:00 ～ 18:00	1	宮古島	20		4	島袋正雄、比嘉常俊、渡慶次哲三、園原謙
11	１月22日(火)	1	宮古島平良市			4	島袋正雄、比嘉常俊、渡慶次哲三、園原謙
12	２月10日(月)	1	県博	6		7	島袋正雄、比嘉常俊、岸本吉雄、新垣正次郎、又吉真三、渡慶次哲三、園原謙
13	２月17日(月)	1	沖縄市美里公民館	24		5	島袋正雄、比嘉常俊、新垣正次郎、渡慶次哲三、園原謙
14	３月13日(金) 10:00 ～ 17:00	1	金武町中央公民館	20		5	島袋正雄、比嘉常俊、新垣正次郎、渡慶次哲三、園原謙
15	３月16日(月) 10:00 ～ 12:00	1	県博	6		7	島袋正雄、比嘉常俊、岸本吉雄、新垣正次郎、玉栄昌治、渡慶次哲三、園原謙
16	３月19日(木)	1	具志川市中央公民館	10		5	島袋正雄、比嘉常俊、新垣正次郎、渡慶次哲三、園原謙
		16		205	6	103	

当時、県立博物館（首里時代）では毎月１回、琉球三線楽器保存・育成会による三線鑑定会が行われていた。会場は講堂の舞台前で、多くの三線愛好家が自身の三線の評価をしてもらうために鑑定会に出品した。島袋正雄氏をはじめ岸本吉雄氏、玉栄昌治氏、新垣正次郎氏、比嘉常俊氏らがいらっしゃった。全員が琉球古典音楽の大先生たちであった。

赴任して、３週間後の10月21日には先生方らを調査員に委嘱し、意味もわかないまま10月28日に初めて三線鑑定会に出席し、三線鑑定の仕方を傍観していた記憶は懐かしい。私の着任と同時に調査が再開され、宮古、名護、恩納村、具志川、金武町、伊江村、本部町など半年間で16回、205挺の三線、そして延べ数にして103人の調査員をつぎ込んだ。半年の調査の遅れ分を取り戻そうと私は懸命であった（表１．平成３年度の三線調査一覧）。

三線調査は稀な文化財調査である。行く先々で歓迎されるのが常であった。テレビ番組の「なんでも鑑定団」張りに喜ばれたのだ。また各地域にいらっしゃる島袋先生門下の方々のネットワークが生かされ、調査される三線は後を絶たなかった。

宮古の調査時のエピソードがある。調査のさなか、午後４時頃から歓迎の夕べの準備が会場の一角で始まった。一升瓶が数本並び、私たち調査員を待っていた。初めてオトーリの洗礼を受けることになることの覚悟をきめた。こんなにすごい量の酒を浴びないといけないと思っていたら、その一升瓶そのものが水割り状態で、すでに水が加えられたものだと説明を受け安堵した。さらには、オトーリの際の参加者の30秒スピーチのスマートさに舌を巻いた。いつもは寡黙な教育委員会の職員の心根を垣間見ることできた貴重な思い出である。しかし職員らは美酒の飲み過ぎで、翌日午前中は仕事にならなかった。

三線調査は、市町村教育委員会の全面的な協力を得て、本島をはじめ離島を多く巡った。私の役回りは調査の記録などの事務局の働きに加え、調査旅行の添乗員、調査後の食事会のセッテイングなどの雑事であった。特に、正雄先生と常俊先生のペアーとは多くの時間を調査で一緒にさせていただいた。お二人とも三線保存・育成会の中心メンバーとして活躍していたが、当時60代後半の先生方の三線を愛する思いはすごかった。本人たちは著名な実演家としてタイトなスケジュールにもかかわらず、愚痴や不満を聞いたことがなく快く調査に参加していただいた。調査を共にさせていただいた先生方は、残念ながら全員が鬼籍に入られたが、その三線への愛情や思いは、私自身の三線への興味関心や調査研究を行う契機になり、礎になった。

先生方のご尽力のおかげで、612挺の家宝三線を掲載した調査報告書『沖縄の三線』は平成５年３月に上梓された。琉球三線楽器保存・育成会はその複製本を500冊増刷りし、調査協力者の要望に応えてくれた。そして、この報告書に基づき、平成６年に新たに三線９挺が県指定文化財として追加指定された。博物館では、その成果を特別展「三線のひろがりと可能性展」で公開することができた。博物館で初めて開催した昭和63年開催企画展「三線名器100挺展」以来、本展を含めて、琉球三線楽器保存・育成会の活動が沖縄の三線研究を牽引してきたともいえる。

園原　謙（沖縄県立博物館・美術館　副参事兼博物館班長）

育成会会員のコラム

「友寄開鐘が現われる」

琉球三線楽器保存・育成会
会長　宜　保　榮治郎

○**宮里春行談**　友寄開鐘は戦前大城幸之一（医者で政治家）が所有していて、自分は度々弾いたことがある。惜しいことに破損していた。破損した場所はチラ「天」ではなく、ティガ（胴）の付け根とジュウ（尾・猿尾）の接点でそこは、銅釘でつながれていた。

そこがなぜ折れているかと言うと、琉球王府時代に奇人で有名な尚灝王（しょうこうおう）（ボージウスー）が孫の誕生祝いの時に、嬉しさのあまり立って踊り出した。その時に誤って足で踏んづけて折ったとの伝承がある。戦災をくぐって人手に渡ったと聞いている。

宮里先生の体験談を聞いてから２、３年経って島袋正雄さん、比嘉常俊さんと私（宜保）の３名で石垣市の三線調査に行った。その時、金城栄蔵さん所有の三線を息子が持参し「これは友寄開鐘です」と言って差し出した。３名はびっくりした。正雄さんが三線ケースから取り出すと「トウイ・竿」と「チーガ」との接点が無残にも折れて、銅釘で繋いで補修してある個所が現れた。「伝えられている通りのものですね」と常俊さんは感無量のようである。

私が持ち主に早速入手経偉について尋ねると、自分の父金城栄次郎が昭和24年に首里鳥小堀の真栄平三線店で七千円で購入したと説明した。なお、金城さん一家は現在は南風原町に移転しているようだ。

「創立三十周年によせて」

国指定重要無形文化財　琉球古典音楽保持者
琉球三線楽器保存会・育成会
副会長　照喜名　朝　一

「鑑定員第九号　右は昭和六十一年八月十一日より平成四年八月二十四日まで、長年にわたり琉球三線楽器保存・育成会員として研鑽されましたので、会則第六章第十七条の規定により、琉球三線楽器鑑定員の資格を授与する」。以上は、私の三線鑑定員証に記載された文言です。当時、会長は宮里春行先生、副会長は島袋正雄先生でした。

私は、「琉球三線楽器保存・育成会」発足当初からの会員です。従って、当会は正確に言うと今年で33年の歴史を重ねたことになります。その間、毎月開催される三線鑑定会の中で、多くの三線を鑑定し、型や種類、棹材の見分け方など勉強を重ねてきました。また歴史的三線や「開鐘（けーじょー）」など、名器に出会い知識を深めてきたつもりです。また当育成会も私同様の経過とともに充実し発展を遂げてきたと思います。

沖縄の三線音楽は、今や国の重要無形文化財に指定され、さらに広く世界へ羽ばたこうとしています。琉球芸能の根幹を成す三線楽器が、国から「伝統工芸品」の認定を受け、平和の象徴「沖縄の宝」として保存育成されるよう、今後も実演家の立場から応援していきたいです。

「アマダンジャ開鐘（けーじょー）の行方」

沖縄県指定無形文化財・沖縄伝統音楽野村流保持者
琉球三線楽器保存会・育成会
副会長　新　垣　萬　善

私は1990年に宮里春行先生からお誘いいただいたことがきっかけで琉球三線楽器保存・育成会に参加しました。会員になってから様々な三線の調査をしてきましたが、中でも特に印象的なエピソードをご紹介します。

1991年頃に、「アマダンジャ開鐘がある」との噂を聞き、島袋正雄先生や岸本吉雄先生と一緒にその三線調査に行きました。アマダンジャ開鐘とは五開鐘のひとつに数えられる名器で、戦時中に所有者が持ったまま亡くなり、家族が目を離していた隙に盗まれてしまった三線です。その当時ずっとアマダンジャ開鐘を探していた所有者の遺族も同行しました。その三線を調査したところ、皆は「これこそアマダンジャ開鐘だろう」と判断しました。しかし遺族はこれではないと言いました。アマダンジャ開鐘は、昔から多くの人々が求めに来ていたので、本人だけが分かるように印を付けていたそうです。アマダンジャ開鐘は現在も行方不明のままです。

これからも育成会の活動を通して素晴らしい戦前の三線が発見されることと思います。今後もウチナーの宝である三線を見つけ、保存して代々伝えていきたいと思っています。

「保存・育成会と三線製作」

沖縄県伝統工芸士
銘　苅　春　政

琉球三線楽器保存・育成会が創立30周年を迎え、記念の展覧会を開催できることに会員としてともに祝い、喜びを分かちあいたいと思います。

私が琉球三線楽器保存・育成会に会員として入会したのは平成10年７月27日です。岸本吉雄先生が育成会にいらした頃で、安冨祖流の大城助吉さんが会から離れられたため、三線製作者がよいのではと誘われたのがきっかけでした。三線を弾くだけでは三線そのもののことがわかるとは限らないので、技術面で三線を理解している人が必要だったと言われました。当時は首里の博物館で鑑定会が開催されていて、様々な三線をみたり、実測することができ研鑽を積むことができました。おかげで平成24年４月23日には、同会から鑑定員の資格を授与されました。

三線製作の技術者からすると、三線の与那型とか真壁型などが形状としては基礎ですが、どれくらい曲げればよいのか、なめらかな曲線を出し、三線のチュラカーギー（美しい顔）を作り出すのはとても難しい。髪の毛のようなミクロの世界に入らないとだめで、形状を意識しミリ単位で考えないと削り出すのは困難なこと。若い人には感覚を研ぎ澄ましながら、きれいに創る美しさを追求してほしい。形状もきちんとみないといけないし、欠点も探してみないといけない。上等な三線を手にしたら気持ちがよく、形も一目でわかります。美しい三線でも部分的に悪いところがあったりします。棹は一生ものです。

私の父は大工の棟梁をしていて、家屋建築の他に、タンスや位牌、臼作りなどをしていました。戦

後に父の仕事を手伝ったことで、腕に自信がついた。戦前から三線作りの専門家として有名だった仲本盛三さんの家を那覇に建築したのが縁で、24歳の時から７年間住み込みで三線作りを修業しました。仲本さんは「与那専門」と評されていて、私が三線作りの道に入る契機となった人です。

「調査鑑定の記録」

琉球三線楽器保存・育成会
事務　**髙江洲　昌　市**

琉球三線楽器保存育成会との関わりは平成20年６月、師匠のお供で県立博物館での調査鑑定会に参加し、調査記録のお手伝いをさせていただいたことが縁で、今日まで事務を担当しております。私の仕事は主に調査の記録と調査書の発送係でしたが、平成20年６月から平成30年11月までの調査記録を製作年代別、型名別に下表にまとめました。調査総数が721挺で、材質は黒木（黒檀）、イスノキ（ユシギー）が主ですが、ほかにも防弾ガラス、ビンロウジ（シュロの木）、パープルハート（建材用）、桑の木の芯材、鉄木、紫檀、縞黒、真黒（マグロ）、マンコノ木（フィリピン木）などの珍しい材質もありました。調査対象の三線にはそれぞれの歴史（由緒）があり、持ち主の想いがいっぱい詰まった貴重な三線だと思いますが、中でも次の三線が特に印象に残っております。

（１）戦後（昭和20年）ハワイの砂島（サンドアイランド）の捕虜収容所で、当時カンカラ三線しか無い時に在留邦人から本物の蛇皮張りの三線が寄贈され、収容所内でエイキチグヮー（Ｐ38に掲載）として愛用されていた三線。

（２）家屋が大火に合ったが、奇跡的に消失を免れた三線。

（３）大戦時の大火で首里旧家の焼け跡の瓦礫の中で見つかった戸道（ハシルミチ）の残り材（黒木）で作られた三線（Ｐ46に掲載）で、長さが足りず面と鳩胸に戸道の後がはっきり確認され、型は不定型で粗作りではあるが、歴史を感じ、製作者の想いが伝わる貴重な三線。

以上簡単ですが、詳細については下記の表①をご覧下さい。なお、調査記録に関しましては、所有者の方々から三線の由来や来歴、また三線についての深い想いなど、貴重なお話を沢山伺いました。大切な愛蔵三線も数多く拝見させてもらいまして、誠に有り難うございました。

表①　平成20年６月～平成30年11月までの調査記録

年代	真壁型	小真壁型	大真壁型	タマイ真壁型	与那型	小与那型	江戸与那型	鴨口与那型	糸蔵長与那型	佐久の川与那型	南風原型	南風原真壁型	久葉の骨型	久葉春殿型	知念大工型	平仲知型	高良大工型	宇根ペーチン型	胡弓	不定型	合計
王府	5	2			3	3															13
明治	22	2			2	2				1	2										31
大正	29	3	0	3	17	8		2		1	3		3								69
昭和	322	5	12	17	102	12	38	5	1		16	2	10	2	25	2			3	3	577
平成	9		1	1	7	1	1				4				2		1		1		28
不詳	3																				3
総数	390	12	13	21	131	26	39	7	1	2	25	2	13	2	27	2	1		4	3	721

「三線展に寄せて」

琉球古典音楽野村流保存会 師範
大　湾　朝　重

沖縄が誇る伝統楽器三線は、家宝として大切に扱われてきました。琉球三線楽器保存・育成会に関わって発掘・調査・鑑定にご尽力された先生方に感謝しています。私自身も、育成会に関わって今後の三線の普及を手伝って行けたらと思います。そして、色々な型の楽器と古い年代物との出会いを楽しみにしています。

「三線」

沖縄県三線製作事業協同組合 理事長
渡慶次　道　政

600年の歴史ある沖縄の家宝三線。
冠婚祭に必ず弾かれている三線。
沖縄の人々の心のより所となっている三線。
三線楽器保存・育成会創立30周年をむかえる事になりました。会員の一人として県内、国内、そして海外に現存している三線を調査、研究し三線の普及につとめたいと思います。

「品格」

沖縄県三線製作事業協同組合 副理事長
仲　嶺　盛　文

私は三線を作る仕事をしています。だから作る側からの見方になってしまう事があります。寸法だったり、丸味だったり、バランスだったり、完璧を求めるあまり、バランスをこわす事もあります。部分的な完璧と総合的なバランスは別な所にあるかもしれません。八重山あたりで築何十年も経過し、家屋としての生涯をようやく終えて解体された梁や柱が運ばれてくることがありますが、その中には目を見張るような、すばらしい黒木があります。何世代もの暮らしを支えてきた家屋の材に新しく三線という命を吹き込むのです。三線と言うのは木の最後の命だと思います。三線に生まれ変わる事で再び何世代も人々に愛される命になっていくことは、ロマンがあります。出品される三線を見させてもらうと、時々、その家庭の文化水準の高さを感じる時があります。品格、気高さ、居心地の良さ、そのたたずまい。出品される方と、それを見せてもらう人の誇りが響き合う空気が心地良く、気の引きしまる思いで三線鑑定会に臨んでいます。

「30周年記念事業によせて」

琉球三線楽器保存・育成会　創立30周年記念事業実行委員会
事務局長　前　原　信　喜

この度、30年の歩みとして記念事業を開催できたことを心より嬉しく思います。

本会は、琉球三線楽器及びこれに関連する諸楽器の保存・育成・調査・研究を目的に、1986年（昭和61年）８月（首里にあった旧県立博物館）に発足しました。以来30年に渡り、幾多の三線（約1,000挺）を公正公平に調査し、世に示す役割を果たしてきました。このような素晴らしい活動をする会の一員として関われることを誇りに思います。また今回は記念事業として、本会が三線の調査や文化財としての三線の普及発展を図ってきた足跡をたどり、調査した中から約60挺の三線を選び、企画展「沖縄が誇る家宝の三線」を県立博物館・美術館と共に開催する運びとなったことは大変喜ばしいことです。さらに、時を同じくして三線が国指定伝統的工芸品として認定されたことも喜びに堪えません。多くの三線愛好者並びに県民の方々が観覧に足を運んでくださることを切に期待します。

「三線鑑定の現状」

琉球古典音楽野村流保存会 事務局長
宮　城　　赳

琉球三線楽器保存・育成会創立以来三十年の間、関わってこられた先達の先生方には、これまでの御苦労に敬意を表したいと思います。私は先任の先生から半ば押しつけ的に育成会の活動を引き継ぎましたが、調査活動を通して、三線に対する県民の思いは大変に大きなものがあり、家宝と言われるように大事にして子孫に継がれているということを実感しました。古く歴史ある三線はもちろんのこと、近代の三線まで大事にされています。また最近はインターネットを通して、マニアの間で取引されている現状があります。その中には古く価値のある三線から奇妙な三線まで様々なものがあります。このような玉石混淆の状態で全ての三線を鑑定会で調査することは、多くの人の労力を必要とすることから、今後はある程度の制限が必要なのではないかと感じています。しかし、人々からの依頼は途絶えることが無く、王府時代から現代までに作られた様々な三線を鑑定することに、人々の三線に対する愛着心の大きさが感じられます。

「三線は沖縄の人の魂」

琉球古典音楽安冨祖流絃聲会 会長
宮　里　敏　則

琉球三線楽器保存・育成会がめでたく三十周年を迎えました。創立からこれまで、ご苦労をいただいた先達の先生方に改めて敬意を表したいと思います。

私は、平成二十六年六月、岸本吉雄先生の勇退に伴い、照喜名朝一先生の推薦で会員として登録を受け入会しました。早いものであれから既に５年が経過したことになります。

三線楽器保存・育成会の歴史を辿ると、安冨祖流絃聲会から、宮里春行先生、岸本吉雄先生、照喜名朝一先生、銘苅春政先生など、歴代の安冨祖流絃聲会々長や人間国宝など錚々たるメンバーが参加

しており、私もその仲間になれたことを嬉しく思うと同時に気の引き締まる思いがします。

三線は、沖縄の人々の「心・魂」と言われます。琉球芸能の根幹を担う三線は、琉球楽器の王様でもあります。従って、材料の黒木とともに今後大切に保存育成していかなければなりません。琉球古典音楽安冨祖流絃聲会を代表し、また保存育成会の一会員として資質の向上を図り、その使命を果たせるよう努力していくつもりです。

「師匠．外間善盛」

琉球三線楽器保存・育成会
会員　上江洲　義　昭

私が琉球三線楽器保存・育成会会員及び三線職人でいるのは、故外間善盛先生のおかげであります。先生とは三線話等で多くの議論をいたし貴重なお話をお聞きいたしました。小声で「こぉきたか。」と私の意見に対してお話をされたことは職人として宝でございます。議論を楽しんでいるような先生のお顔を浮かべ、当時お話された事を思いながら三線製作に励み、三線と真摯に向きあい外間先生の教えを守り研鑽してまいりたいと思っております。感謝。

「先生方の経験を、次の世代に」

琉球三線楽器保存・育成会
会員　岸　本　尚　登

私は2008年から琉球三線楽器保存・育成会の会員になりました。調査会では琉球三線の型、材質、古い琉球三線の見方を学び、先生方からは、色々な工工四の琉歌の時代背景や意味、戦前のウチナーのお話を習っています。

2011年７月から８月には、会長の岸本吉雄先生と副会長の外間善盛先生とともに、南米琉球三線調査の機会を得ました。先生方はお二人とも85歳以上で、30時間の飛行の長旅は厳しかったことと思いましたが、とてもお元気で300挺以上の三線を調査する事ができました。現地ではそれぞれの沖縄県人会の人々から盛大な歓迎を受けました。地球の反対側の沖縄県人の方々は、とってもウチナーが大好きで、ウチナーから持ってきた三線も大切に扱っていました。海外移民１世２世は、とっても苦しくて始めの頃は、食べる物もやっとで、生き抜く事で精一杯、苦しい時に、何処からか聞こえてくる三線の音色で、ウチナーチュを再確認しウチナーを思い浮かべていたと聞く事ができました。三線とウチナー移民の方々のお話を聞いて勉強になりました。

これからは、何世代に渡って大切に継いできた三線の素晴らしさや、先生方から習った事を次の世代に伝えるように、頑張ります。

琉球三線楽器保存・育成会会則

第一章

第一条　本会は琉球三線楽器保存・育成会とする。

第二条　本会の本部事務局は会長宅を住所とし、必要に応じ地方に支部を置くことができる。

第二章　目的及び事業

第三条　本会は琉球三線楽器及びこれに関連のある諸楽器の保存・育成・調査・研究を行うことを目的とする。

第四条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

一、名器を文化財として指定させる運動を積極的に行う。

二、県内、県外の由緒ある名器の所在を調査する。

三、定期的に名器の鑑定会を行う。

四、新しい作品の展示会を行い、名工を育成する。

五、内外関係団体との交流を行う。

六、その他本会の目的を達成するために必要な事業を行う。

第三章　会員

第五条　会員は実演家で楽器保存に熱心な者及び、楽器の良し悪しの判断ができる者を会員とし、また会員に欠員のある場合は会の承認を経て会員とする。

第六条　会員及び、賛助会員は第十八条に定める会費を納めるものとする。

第七条　会を退会しようとする者は、理由を付して退会届けを提出しなければならない。

第八条　本会の趣旨に賛同する者を賛助会員とすることができ、賛助会員は、会の承認を経て会長がこれを委嘱する。

第四章　役員

第九条　本会に左の役員を置く。

会　長　一名　　事務係　一名

副会長　一名　　監　事　二名

第十条　会長及び副会長は、会員の互選により選任し、監事及び事務係は会員の中から委嘱する。

第十一条　会長は本会を代表し、本会の運営にあたる。

第十二条　副会長は会長を補佐し会長不在のときは代行をつとめる。

第十三条　事務係は書記、会計を行う。

第十四条　監事は本会の会計を監査し、会に報告する。

第十五条　役員の任期は三年とし、再任は妨げない。

第五章

第十六条　会議は会長が招集し、年一回これを開く。

第六章

第十七条　本会は会員の中で長期（三年以上）にわたり研鑽をつんだ者に対して鑑定委員の資格を授与する。

第七章

第十八条　本会の経費は左をもってあてる。

一、会費

一、事業収入

一、寄付金

一、その他

第十九条　本会の会費は年間壱万円とする。

第二十条　本会の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年の三月三十一日に終わる。

付則

一、本会則は、昭和六十一年八月十一日より施行する。

一、本会則は、平成二年十二月十七日に一部改正し、当日施行する。

一、本会則は、平成四年八月二十四日に一部改正し、当日施行する。

一、本会則は、平成二十六年八月二十七日に一部改正し、当日施行する。

一、本会則は、平成三十年四月一日に一部改正し、当日施行する。

関連催事

■琉球三線楽器保存・育成会 創立30周年記念式典

日　時：２月５日（火）午後２時～４時

場　所：博物館３階　講堂

内　容：功労者表彰、三線演奏、琉球舞踊

■学芸員講座「三線の正体－棹や胴の銘書きからわかること－」

日　時：２月９日（土）午後２時～４時

場　所：博物館１階　講座室

講　師：園原謙（副参事兼博物館班長）

■シンポジウム「三線が奏でるウチナーンチュの肝心（チムグクル）」（第500回文化講座）

日　時：２月16日（土）午後２時～５時

場　所：博物館３階　講堂

第一部：講話「ウチナーンチュの生活の中に息づく三線」

講　師：上原直彦（放送人）

第二部：シンポジウム「ウチナーンチュの「文化財（家宝）」としての三線」

パネラー：高良倉吉・大城學・谷口真吾

コーディネーター：園原謙

■ワークショップ「親子でつくろう！カンカラ三線」

日　時：２月23日（土）午前10時～ 13時

場　所：博物館１階　実習室

講　師：町田宗男・町田宗武（三線工房まちだ屋）

■シンポジウム「三線の伝統と未来 －県産三線普及ブランド化事業報告」

日　時：３月２日（土）午後２時～５時

場　所：博物館３階　講堂

第一部：三線ブランド化の取り組みについて

第二部：県産三線ブランド化事業委員11名によるクロストーク

第三部：特別仕様三線３モデル（大工モデル・知名モデル・宮沢モデル）の引き比べ

■ワークショップ「三線づくりの実演会」

日　時：３月２日（土）午前10時～午後１時

場　所：博物館１階　実習室

内　容：琉球三線の棹削り、カラクイ削り、本皮張り、漆塗り工程等の実演

実演者：沖縄県三線製作事業協同組合の組合員

■さんしんの日　特別イベント（演奏会）

日　時：３月４日（月）午前10時～ 13時30分

場　所：エントランスホール

内　容：12時と１時の時報とともに参加者全員による合奏「かぎやで風」他数曲

協　力：沖縄伝統音楽野村流保存会、沖縄伝統音楽安冨祖流保存会、沖縄伝統音楽箏曲保存会等

琉球三線楽器保存・育成会創立30周年記念事業実行委員会の備忘録

1．名簿

会　　長　宜保榮治郎
副 会 長　照喜名朝一　新垣萬善
委　　員　銘苅春政　高江洲昌市　上江洲義昭　岸本尚登　宮里敏則　仲嶺盛文　渡慶次道政
　　大湾朝重
会　　計　宮城赳
事務局長　前原信喜
ボランティア協力　糸満和美

2．活動の概要

2017年（平成29）４月12日（水）、琉球三線楽器保存･育成会創立30周年記念事業実行委員会（以下、「実行委員会」という。）を立ち上げた。それから、ほぼ毎月第２・第４水曜日、博物館の担当者と会議をもち、記念事業にかかる展覧会や関連催事について話し合ってきた。会議の回数は40回近くになった。実行委員会では、博物館の協力を得て、鑑定会で見出された三線の所蔵者に展覧会への出品依頼を出し、40数名の方々から60挺以上の三線の借用許可をいただいた。また、図録作成の資金を集めるため、企業や個人団体へ協賛広告の依頼を行い、最終的に40件余の広告を集めることができた。さらに、沖縄銀行(株)「おきぎんふるさと振興基金」へ応募し、100万円の助成金をいただいた。これらは記念事業の運営経費に役立てた。関係各位に大変感謝している。

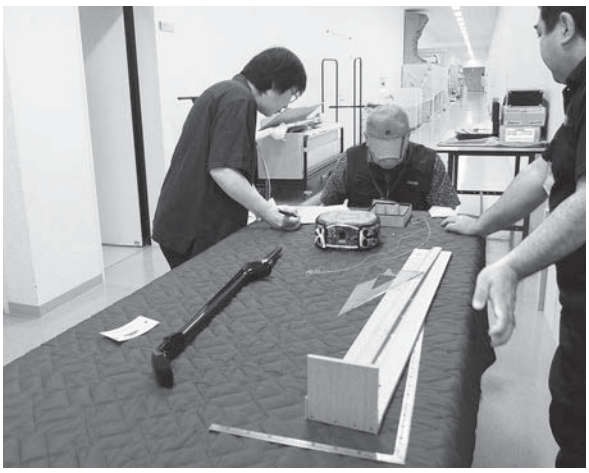
展覧会については、展示の実施設計及び図録編集等は博物館が担当し、図録の印刷経費等は実行委員会の資金で賄うよう分担した。関連催事では、まず30周年記念式典で琉球三線楽器保存・育成会の歴代の会長・副会長等へ感謝状を送り、三線演奏や琉球舞踊で幕開けを祝する計画である。また、博物館と連携した学芸員講座、文化講座、シンポジウム、ワークショップ等、多岐にわたるイベントも計画している。さらに、３月４日「さんしんの日」には、当館のエントランスホールを会場に、三線愛好家による大演奏会を催すことを企画した。以上の企画を行ってきた会議の主な内容を記録しておく。

会議の日誌

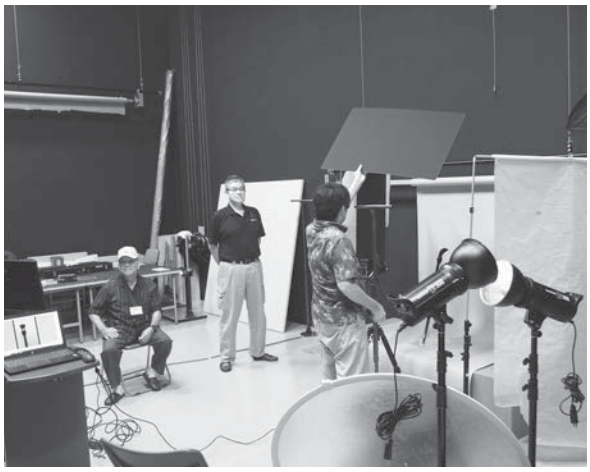
月日	会議	議事内容
H29.4.12	第１回	記念式典・展覧会・記念誌発行等について話し合う。
H29.6.14	第２回	記念事業実施要領案について話し合う。
H29.6.21	第３回	式典、展覧会（100挺展）、記念誌発行、座談会等について話し合う。
H29.7.12	第４回	平成31年２月～３月で、さんしんの日（３/４）を挟む期間に展示会を希望。
H29.7.19	第５回	記念式典・祝賀部会、三線100挺展、記念誌発行部会の設置を議論。三線名器の行方を調査し、展示会で出展することも検討。
H29.8.23	第６回	記念誌の内容について議論。式典での功労者表彰案の作成。
H29.9.13	第７回	100挺展を念頭に、展示資料の内容を検討。県博所蔵の文化財指定品をはじめ、これまで鑑定した中から選抜した個人所蔵の三線を展示する。
H29.9.27	第８回	展覧会の日時案提示。平成31年２月５日～３月10日で決定。
H29.10.11	第９回	展覧会の持ち方と予算の区分・役割分担について話し合う。

月日	会議	議事内容
H29.10.25	第10回	展示する三線と展示構成を検討。予算案提示。
H29.11.8	第11回	博物館側より、展示要項案と図録の構成案を提示。
H29.11.22	第12回	広報や資金作りのための名刺作成。事務局を三線組合事務所に設置。文化振興会への助成金を申請。
H29.12.13	第13回	記念誌と図録の一本化。図録の予算は実行委員会が確保する。三線出品リストの作成と出品依頼文書の作成等。
H29.12.27	第14回	12月20日付けで三線所蔵者宛の出品依頼文作成。趣意書・実施要項は引き続き作成中。
H30.1.10	第15回	協賛広告の依頼文書作成。名刺完成。事務局を設置。
H30.1.24	第16回	事務局の事務担当者紹介、依頼する所蔵者リストの確認。出品依頼文をはがきから書簡に変更。
H30.2.14	第17回	２月８日付けで三線所蔵者への依頼文改定し、送付開始。各委員の役割分担を明文化。
H30.2.28	第18回	平成20年度おきぎんふるさと振興基金へ申請。展示の借用依頼開始。期間中の関連催事について話し合う。
H30.3.14	第19回	これまでの決定事項の確認。図録の一部内容と作成費用は実行委員会が担当する。協賛広告の協力依頼を始める。
H30.3.28	第20回	沖縄県文化振興会の助成は受けられず。協賛広告依頼の各理事への割り当て。関連催事の文化講座で上原直彦氏に講話を依頼して了解いただく。
H30.4.11	第21回	博物館側より、後援団体の候補一覧提示。予算の配分については、展覧会の図録の予算は実行委員会で確保し、展覧会の資料の運搬や展示関連作業は博物館が担当する。
H30.4.25	第22回	依頼文書発送状況の確認。文化講座のシンポジウム講師を決定。
H30.5.9	第23回	三線の出品数49挺に。資金集めは２件のみ、引き続き行う。関連催事について話し合う。
H30.5.23	第24回	協賛金集めは６月末を目途に。関連催事にカンカラ三線づくりを入れる。
H30.6.13	第25回	協賛広告17件。博物館側から展示レイアウト、展示資料等を提示。
H30.6.27	第26回	おきぎんふるさと基金の助成が内定。特別協賛として図録に載せる。
H30.7.11	第27回	７月10日に沖縄銀行でふるさと振興基金の授与式あり。ほか、協賛広告23件。式典での功労者への賞状・関連催事の内容について話し合う。
H30.8.9	第28回	関連催事の内容と役割分担（記念式典・さんしんの日・座談会等）。博物館から後援団体の決定、図録案と見積額の提示、出品リスト等を報告。
H30.8.22	第29回	三線展での古いレコードの上演を検討。図録の部数を減らす。チラシ・ポスター案提示。
H30.9.12	第30回	鑑定した三線は60挺。展示順は時代毎にわける。展覧会で醸成する映像資料について。図録の発行部数は無料配布用750部と頒布用750部とする。
H30.9.26	第31回	会期中に三線ゆんたく会を開催。ブランド委員会のシンポジウムと三線づくりの実演会との調整。
H30.10.10	第32回	博物館から、10月後半～ 11月まで個人所蔵の三線の写真撮影を行うと連絡。岸本、上江洲両委員が立ち会う。
H30.10.24	第33回	写真撮影の進捗報告と三線借用。あわせて由来等の聞き取りをし、図録用に育成会会員の集合写真を撮影。宜保会長と照喜名副会長へのインタビューあり。
H30.11.14	第34回	11月７日、三線が国の伝統工芸品に指定されたと報告あり。図録にのせる個人蔵の三線60挺は撮影済み。会員のコラム提出終了。山城氏の蓄音機調査、借用予定。RBCの映像と東博の三線借用は断念。ポスター・チラシ完成し配布する。
H30.11.28	第35回	さんしんの日の具体的内容について話し合う。図録の用語確認。
H30.12.12	第36回	さんしんの日の具体的な内容調整。博物館から、「直富主三線」の展示の提案があり、全員一致で決定。図録への所蔵者名の掲載についての確認。

実行委員会の会議の様子



展覧会へ出品する三線資料の点検作業



図録掲載用写真の撮影風景

協力者及び協力機関

謝辞
　本展覧会の開催にあたり、下記の関係者各位（五十音順、敬称略）から多大な御指導、ご協力を賜りました。ここに記して深く感謝の意を表します。

〈個人〉（敬称略、五十音順）
新垣清仁、新垣万善、石垣雄三、伊禮吉信、上江洲安俊、上原隆、上原直彦、上間克美、運天伊作、大城賢治、大城學、大湾朝重、翁長良明、嘉数進、嘉数盛喜、神谷伸、神谷清吉、川田美智子、川田力也、川田禮子、金城敬三、金城武一、具志勝枝、久手堅憲珍、村田グラント定彌、幸地憲夫、島岡稔、島袋奈美、島袋均、謝花喜哲、城間重雄、城間雄伍、砂川亨、高良倉吉、棚原憲己、谷口真吾、多和田光作、照喜名朝一、照喜名朝定、照喜名朝栄、照屋勝武、仲田悦子、仲田治己、仲地健太、中濱美海、西原安治、比嘉勇、普天間栄進、外間裕朋、前里幸廣、町田宗男、町田宗武、松田邦昭、松田優美、嶺井和美、宮城赳、宮里敏則、銘苅盛隆、屋宜睦夫、山城興松、山城政幸、吉田光智

（団体）県産三線ブランド化事業委員会

〈特別協賛〉（公財）おきぎんふるさと振興基金

〈主催〉沖縄県立博物館・美術館／琉球三線楽器保存・育成会
〈共催〉沖縄県三線製作事業協同組合

〈後援〉沖縄県教育委員会、(一社)伝統組踊保存会、琉球舞踊保存会、沖縄伝統音楽野村流保存会、沖縄伝統音楽安冨祖流保存会、沖縄伝統音楽湛水流保存会協議会、沖縄伝統音楽箏曲保存会、八重山伝統舞踊保存会、八重山古典民謡保持者協会、琉球歌劇保存会、沖縄タイムス社、琉球新報社、ＮＨＫ沖縄放送局、沖縄テレビ放送(株)、琉球朝日放送(株)、琉球放送(株)、(株)ラジオ沖縄、ＦＭ琉球(株)、(株)エフエム沖縄、(株)エフエム那覇、沖縄ケーブルネットワーク(株)

主要参考文献

池宮喜輝『琉球三味線寶鑑』東京沖縄芸能保存会、1954年
球陽研究会『球陽』角川書店、1974年
沖縄県教育庁文化課『三味線に使われる蛇皮の資源量調査報告書』沖縄県教育委員会、1980年
『三線名器100挺展』（図録）沖縄県立博物館、1988年
『三線のひろがりと可能性』（図録）沖縄県立博物館、1999年
沖縄県教育委員会『沖縄の三線-歴史資料調査報告書Ⅶ-』琉球三線楽器保存育成会、1993年
宜保榮治郎『三線のはなし』ひるぎ社、1999年
『琉球絵画展』（図録）沖縄文化の杜、2009年
園原謙『三線の型の正型と名器の音色分析』琉球三線楽器保存育成会、2013年
『三線のチカラ-形の美と音の妙-』（図録）沖縄県立博物館・美術館、2013年
沖縄県立博物館・美術館『開館10周年記念博物館収蔵資料100選』沖縄県立博物館・美術館、2017年